ダンスでいこう!!
DANCE IT IS !!

コンテンポラリーダンス・プラットフォームを活用した振付家育成事業

「ダンスでいこう!!」2020 年度　報告書

目次

2020 年度「ダンスでいこう!!」を振り返って ……2
1、事業全体の実施目的・概要
(1)経緯と目的 ……3
(2)実施概要・体制 ……3
(3)開催クレジット ……5
2、事業の報告
(1)各プラットフォームの事業報告とまとめ、参加者の声 ……6
①【札幌プラットフォーム】 運営:北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 ……7
②【名古屋プラットフォーム】 運営:ダンスハウス黄金 4422 ……13
③【城崎プラットフォーム】 運営:Dance Camp Project ……18
④【神戸プラットフォーム】 運営:NPO 法人ダンスボックス ……24
⑤【広島プラットフォーム】 運営:FREE HEARTS ……28
⑥【札幌/京都クリエイティブパートナー】
運営:C3/Contact Choreograph Crossing 事務局:(一社)ダンスアンドエンヴァイロメント ……33
⑦【福岡クリエイティブパートナー】
運営:フルイドハグハグ/山崎広太、 NPO 法人コデックス/スウェイン佳子 ……38
⑧【創造環境パートナー/ダンスヒストリー】運営:ダンスヒストリー・スタディーズ ……43
⑨【創造環境パートナー/ダンスメディア】運営:一般社団法人ダンス・ニッポン・アソシエイツ ……46
⑩【公演プラットフォーム】運営:京都コレオグラフィーアワード実行委員会 ……49
(2)その他(Kyoto Meeting 報告会、ダンスミーティング) ……63

表紙写真:
上段左/名古屋プラットフォーム 音響講座
上段右/神戸プラットフォーム Alain sinandja「How to make an artistic folder」
下段/KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD2020 下島礼紗(ケダゴロ)「sky」

2020 年度「ダンスでいこう!!」を振り返って

佐東範一［JCDN］

2020 年 3 月に全国的に広がったコロナ禍のために、本事業をどのように開催できるのか、実際に参加者を集めて実施できるのか、オンラインにするべきなのかを、全てのプログラムについて共催者である各プラットフォームと悩んだ 1 年であった。

通常は、4 月に入るとすぐにチラシやウエブサイトの制作にかかるのだが、可能な限り各プログラムの時期を年度の後半に移動していただき、様子を見ることにした。しかし広報などを考えると日程確定のタイムリミットは 7 月で、その時点で可能なものはオンラインに変更し、オンラインでの開催が難しいプログラムは、緊急事態宣言などで実施出来ない場合をギリギリまで想定した。

そのような最中、2020 年に新たなプログラムとして開始する事にしていた“若手振付家のための公演”をどうするか、検討を重ねる上で、公演だけではなく後押しになる賞を創ろう！ということになった。公演の制作協力をお願いしていた一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメントの坂本さんから、「KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD」というネーミングをいただいた。コロナによって活動が難しくなっている今だからこそ、やろうか！ということになった。
公募の結果、全国から 55 組の若手振付家作品が応募していただいたことに、主催者として勇気をもらった。そしてこれだけの若手振付家が（実際はもっと）存在していることに、「ダンスでいこう!!」が目指す、日本の振付家のための環境を創っていくことの必要性を改めて感じた。

各プログラムとも最後の最後まで実施を悩み検討した結果、札幌プラットフォーム（以下 PF）は、オンラインと実施の半々、名古屋 PF と城崎 PF は全員 PCR 検査を受けた上での実施、神戸 PF は全てオンライン、広島 PF は、徹底したコロナ対策をした上でのワークショップの実施と関係者のみへの上演とした。

札幌/京都クリエイティブパートナー（以下 CP）は、ワークショップは行ったが、上演は無観客で映像配信、福岡 CP は、実施を予定していた講師の山崎広太氏も 1 か月前に日本に入っていたが、ワークショップの直前に福岡に緊急事態宣言が出され急遽オンラインに変更し実施した。ダンスヒストリーとダンスメディアは、対面が難しくなりオンラインでの実施。

公演 PF として行うことになった「KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD」は、出演者、テクニカルスタッフ、制作など 55 人全員が PCR 検査を受けて実施。緊急事態宣言期間にちょうど当たらず、会場にキャパ半分の観客を入れることができ、同時にライブストリーミング配信を行った。

各地でのコロナ対応にすべての共催者が苦労されたことと思うが、コロナ禍によって新しいダンスの可能性も見えてきた。もしコロナがなければ、オンラインでのワークショップや公演のライブ配信は未だ全く考えなかったと思う。ダンスは、“ナマ”で体験し、“ナマ”で観るものと思い込んでいたが、オンラインでもワークショップが可能なことと、それによってこれまで来られなかった人も参加ができること、より広範囲の幅広い人にダンスを体験、鑑賞してもらえることを知った。このさきコロナが収まった後でも、オンラインでの実施や配信の可能性を活かしていくことがダンスを広げていくために有効だと思えた。

いろいろと大変であったが、学ぶことの多い今年度の「ダンスでいこう！！」であった。

―2019 年、新しい時代の始まりに、新しいコンテンポラリーダンスの人材育成プロジェクトを開始しました。
ダンスのアーティストが生まれ、育つ環境、新しいダンス作品が生み出される環境を全国のダンスのオーガナイザー（運営団体）が核となり、互いに連携しながら、形創っていきます。
日本のあらゆる場所が起点となり、他の分野や地域の公共団体やホールなどと協働し、未来に向けて、ダンスの今を切り開いていきたいと思います。―

1、事業全体の実施目的・概要

（1）経緯と目的

2019 年 4 月より、日本でほとんど行われてこなかった“振付家育成”プロジェクトを開始した。JCDN の会員である日本全国のダンスアーティスト、オーガナイザー等を対象に企画公募を行い、各地で育成のための拠点を作っていくことを目的に、「コンテンポラリーダンス・プラットフォームを活用した振付家育成事業『ダンスでいこう!!』」と名付けた。全国のダンス関係者が、力を合わせて振付家をみんなで育てていく方法を創り出す試みである。

背景として、日本では振付家を育成するための組織や機関が少なく限られており、ダンサーを育成するためのダンススタジオは数多くあれども、振付家を目指そうとすると海外に出るか、カンパニーに所属し、その中で独自に方法論を見つけていくしかないという事がある。また、地域におけるコンテンポラリーダンスの人材育成は、公立文化施設などにおいて一部行われてきているものの、その制作機能が弱まる中、これまで専門的な民間団体により個別に行われていて、業界全体を総合的に俯瞰する視点に欠けていたという事などが挙げられる。

本事業「ダンスでいこう!!」では、全国各地にあるコンテンポラリーダンスの拠点を活用し、若手から中堅を対象とした振付家のための人材育成プラットフォームを形成していく。

プラットフォームごとに異なるニーズや課題に対し「教授等の機会の提供」「マネジメント能力の向上」「国際性の獲得」「社会性の獲得」「地域内の人材交流」「他分野人材との交流」を主な目的として事業を行い、日本国内のコンテンポラリーダンスの振付家を多方向から育成する。このプラットフォーム形成によって全国各地の人材が育ち、プラットフォーム間のつながりによって振付家をとりまく創造環境が改善され、舞踊におけるコンテンポラリーダンスの役割と社会的インパクトを確かなものとしていきたい。

（2）実施概要・体制

◎振付家育成プラットフォーム

以下4つのカテゴリーによるプラットフォームが、それぞれ独自の事業を企画・運営する。

1)地域プラットフォームと連動した振付家育成事業

プラットフォームの核となる創造拠点の特性を勘案し、国際性のあるトップレベルの振付家の養成と並行し、地域の社会課題を視野に入れた活動を行う若手の振付家の養成を行う。

①【札幌プラットフォーム】―運営：北海道コンテンポラリーダンス普及委員会
「Sapporo Choreo（サッポロ・コレオ）振付家養成講座」

②【名古屋プラットフォーム】―運営：ダンスハウス黄金 4422
「レジデンスアーティスト育成事業 2021」

③【城崎プラットフォーム】―運営：Dance Camp Project
「Dance Camp クリエイション＆ダイアローグ・ワークショップ」

④【神戸プラットフォーム】―運営：NPO 法人ダンスボックス
「DANCE ARTIST VIEW2020　セルフカルチベート企画」

⑤【広島プラットフォーム】―運営：FREE HEARTS
「ダンスアートプロジェクト！！」

2)振付家育成手法の開発とクリエイションの連動事業

各地のダンスアーティスト・カンパニーを“クリエイティブパートナー”とし、クリエイションと連動した振付家の養成を行う。振付家に求められる高度なスキルや総合芸術としての構成・演出力を身につける手法として、他の芸術分野との協働を試み、特定の身体メソッドによる表現活動の開発を行う。

⑥【札幌/京都クリエイティブパートナー】

―運営：C³/Contact Choreograph Crossing　事務局：(一社)ダンスアンドエンヴァイロメント

「建築とコンタクト(京都-札幌)」

⑦【福岡クリエイティブパートナー】―運営：フルイドハグハグ/山崎広太、 NPO 法人コデックス/スウェイン佳子

「わたしと身体のゆるやかなダンス革命　イン福岡」

3)創造環境整備事業

ダンスに関わる専門的な団体と連携して、レクチャーや、マネジメント技法の習得を通して、コンテンポラリーダンスの創造環境全体の向上に寄与する人材の育成を行う。

⑧【創造環境パートナー/ダンスヒストリー】―運営：ダンスヒストリー・スタディーズ

「ダンサー・振付家・制作者に“役に立つ”バレエ・ダンス史」

⑨【創造環境パートナー/ダンスメディア】―運営：一般社団法人ダンス・ニッポン・アソシエイツ

「ダンスを撮る！-第 4 回ダンス映像撮影ワークショップ-」

4)公演事業

(1)-(3)の次のステップとして行う公演事業。

⑩ 【公演プラットフォーム】「KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD 2020

―若手振付家によるダンス公演＆作品を巡るディスカッション―」

―運営：京都コレオグラフィーアワード実行委員会

◎全体の事業　(運営：NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク[JCDN])

1)キックオフ・ミーティング

日時：7 月 21 日　13:00-16:00　zoom によるオンライン開催(非公開)

内容：事業全体の開始前に各プラットフォーム代表者による説明会と“振付家・ダンスアーティストが育つための環境をいかに作っていくか”をテーマにしたダンスミーティングを開催。

※昨年度は公開にて行ったが、今年はコロナウィルスの影響を受けてオンラインで実施するため、非公開で行った。

13:00-13:10　事務局(JCDN)より事業運営に関する説明　※事前に資料を配布、重要な点のみ説明

13:10-14:40　各プラットフォーム運営団体代表者による、プログラムの発表(各組 10 分)

14:40-16:00　ダンスミーティング 「公演プラットフォームについて/振付家を育成するには」

2)　JCDN 及び各地の運営団体による視察・オブザーブ委員の設置

事務局および各地の運営団体から、他の地域の視察を行うことでピアレビュー(同業他者による評価)の参考とするほか、横のつながりを深め、運営団体同士のネットワーク作りに活かすことを目指している。(※2020 年度はコロナのため実施せず。)

また、ダンスに精通し、アーティストの育成に対して見識のある 2 名程度の専門家に、公演プラットフォームのアーティスト/作品を選出いただくほか、公演後に作家及び当事業に対するフィードバックをいただくこととした。

[オブザーバー　※敬称略]　加藤種男(クリエイティブ・ディレクター)、林慶一(d倉庫)、萩谷早枝子(ST スポット)

3)「KYOTO Meeting」(報告会・ミーティング)

※公演プラットフォーム「KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD」と同時開催。

[報告会]

日時: 3 月 11 日(木) 13:00-16:00

内容:「ダンスでいこう!!」2020 年度の総まとめとして、全国 10 のプラットフォームのうち、9 団体が事業報告を行う。写真や映像を交えて各団体 15 分ずつプレゼンテーションを行い、最後に質疑応答の時間を設ける。

[ミーティング]

日時: 3 月 12 日(金) 11:00-13:00

内容:『コロナの時代にダンスアーティストはどうサバイバルしていくのか、そして、ダンスはどう変わっていくのか?』と題して開催。コロナ禍の中、ダンスの公演やワークショップは中止や延期を余儀なくされた一方で、ZOOM によるワークショップや、ダンス公演のライブ配信など、コロナによって新しく生まれた表現方法がある。このミーティングでは、コロナ禍の経験から見えてきたこと、課題・可能性などを、参加者と話し合う。

会場: 京都芸術センター フリースペース

共催:京都芸術センター Co-program カテゴリーD 採択企画

4) 公演プラットフォーム(KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD)の運営、ダンスネットワークの構築

京都で行う公演プラットフォームの事務局業務を担う。また、公演プラットフォームの準備段階で、必要に応じて、アーティストのためのマネジメント講座や、地域間の交流を促すダンスミーティングなどを開催し、各地のダンス創造環境に関する課題を共有する場を積極的に設ける。

5)その他の事務局業務

事務局ミーティング、事業全体の全国的な広報、事業実施計画から報告書作成、

文化庁及び凸版印刷株式会社(今年度の文化庁側の事務局)との業務全般、各運営団体との連絡調整など

(3) 開催クレジット

文化庁委託事業「令和 2 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

主催:文化庁/NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)

各地共催・制作・協力:

北海道コンテンポラリーダンス普及委員会/ダンスハウス黄金 4442/Dance Camp Project/城崎国際アートセンター(豊岡市)/NPO 法人 DANCE BOX/FREE HEARTS/広島市安芸区民文化センター/C³/Contact Choreograph Crossing/一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメント/micelle/あけぼのアート&コミュニティーセンター(札幌)/フルイドハグハグ/NPO 法人コデックス/ダンスヒストリー・スタディーズ/Dance New Air(一般社団法人ダンス・ニッポン・アソシエイツ)/京都芸術センター(Co-program カテゴリーD「KAC セレクション」採択企画)

事務局:NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)

統括:佐東範一 運営:神前沙織、榊原愛、松岡真弥

〒600-8092 京都府京都市下京区神明町 241 オパス四条 503

Tel: 075-361-4685 Fax: 075-361-6225 MAIL:danceitis@jcdn.org Web: http://www.jcdn.org

2、事業の報告

（1）各プラットフォームの報告とまとめ

［全参加者（育成対象者）数］ 延べ145名
（10 のプラットフォームの参加者の総数）

（事務局まとめ）
2020 年度は、コロナ禍の中での実施であったため、各地様々な対応を行った。

・札幌プラットフォーム 「Sapporo Choreo（サッポロ・コレオ）振付家育成講座」は、オンライン＋ワークショップの実施。オンラインは全国からの参加があり、振付を学びたい新しい層に繋がった一方でやはり対面での実施はキャンセルが増え小人数での実施になったが、そのため一人一人に対してより深いところまで掘り下げて行えた。

・名古屋「レジデンスアーティスト育成事業 2021」は、2 名のレジデントアーティストを公募選出し、地元名古屋のダンサーと振付作品を制作＋照明、マネジメントなどのセミナーを実施。オンラインではなく対面で実施したが、コロナが増加した時期にぶつかり直前のキャンセルが出たが、予定通り行った。

・城崎国際アートセンターでの「Dance Camp クリエイション＆ダイアローグ・ワークショップ」は、講師の一人がコロナ対策のために来日ができなくなったが、参加者は想定以上の応募があり、選考の結果 4 組のアーティストを選出。全員予定通り参加がかない、充実した内容となった。

・神戸 DANCE BOX「DANCE ARTIST VIEW2020 セルフカルチベート企画」は、成果報告会など一部をオンラインに変更するなどの対応は必要であったが、もともとオンラインで計画していた事業もあり、ほぼ予定通りの実施ができた。

・広島「ダンスアートプロジェクト！！」は緊急事態宣言が発出されていないこともあり、コロナ対応を徹底した上で、対面で実施し、ショーイングも行うことができた。広島は、初めて振付に挑戦する若者を対象に行ったが、最後の参加者の感想は、主催者の期待を超えるほど多くの学びがあったことがうかがえる。

・クリエイティブパートナーの札幌/京都は、「建築とコンタクト」というコンタクト・インプロヴィゼーションを基軸にしたものだった。アーティストの本拠地である京都では、参加者は予定通り集まったが、札幌では、コロナのために昨年度より少なかった。しかし各作品を YouTube で配信するなど、新しい広がりを見せた。

・福岡での、アメリカを拠点に活動する山崎広太のワークショップ「わたしと身体のゆるやかなダンス革命 イン福岡」は、山崎自身は隔離期間を考え 12 月に来日し、準備を進めてきたが、ワークショップ直前に福岡に緊急事態宣言が発令され、急遽オンラインに切り替えた。実際に対面で出来なかったことは残念であるが、山崎のオンライン・ワークショップを元に独自のウエブサイトを制作し、それぞれの振付作品やイメージをサイト上に貼り、それに対してコメントするなど、ZOOM やサイトなど様々な方法を組み合わせることによって、オンラインでもかなり充実したワークショップが行えるひとつのモデルになったと思う。

・創造環境パートナーのダンスヒストリー「ダンサー・振付家・制作者に“役に立つ”バレエ・ダンス史 広島編・zoom 編」とダンスメディア「ダンスを撮る！-第 4 回ダンス映像撮影ワークショップ-」のセミナーも、早くからオンラインでの実施を想定していたために、計画通りに実施ができた。

次ページより、各プラットフォームの運営団体による実施報告及び成果報告をご覧ください。

①【札幌プラットフォーム】

Sapporo Choreo（サッポロ・コレオ）振付家養成講座

運営｜北海道コンテンポラリーダンス普及委員会
（委員長：森嶋 拓）

［運営団体プロフィール］
2011 年 1 月にコンテンポラリーダンスと舞踏などの先鋭的舞踊の普及を目的に設立。これまでにダンスフェスティバル、公演やイベント、ワークショップや講座などの事業を通して北海道内のダンスシーンを活性化してきた。国内外のダンサー／団体による北海道公演の制作補助も行っており、北海道とその他の地域を繋げる役割も担っている。

［プログラムの特色］

●初心者から現役振付家まで、レベルに合わせた三つのコース。
●三名の講師およびメンターによる振付の基礎理論を学ぶ講座。
●セルフプロモーションのための資料、写真、映像などについても学ぶ。

創作にあたって何から手をつけたら良いかわからない方には基本知識を。すでに活動を行っている方には一緒に悩んでくれるメンターと、プロモーションに関する全面的なサポートを。ダンスを観るのが好きなだけで、自分が踊るのはちょっと･･･という方にはよりダンスを深く味わう為の視点を。今年は講座を受けてみたいだけの方から、本格的に活動している振付家まで、A～C の3コースを用意した。オンラインを活用のため全国の方も参加可能なプログラム。

実施概要

◆A コース／振付の方法論についてのオンライン講座

［対　象］･ダンス未経験でも話を聞いてみたい方　･観る専門だけどダンスへの理解をより深めたい方
･学術的な観点から興味がある方　　･振付の方法論を学びたい方、興味がある方
･別分野のアーティストで身体的パフォーマンスに興味がある方
･振付家になりたいダンサー　･振付の能力を高めたい振付家

［日　時］ 8 月 25 日(火)26 日(水)28 日(金)　20:30～22:00　全 3 回　オンライン実施

［講　師］ 平原慎太郎(OrganWorks)

◆B コース／オンライン講座＋グループワーク

［対　象］･別分野のアーティストで身体的パフォーマンスに興味がある方　･作品作りの現場に立ち会ってみたいダンサー
･振付家になりたいダンサー　　･振付の能力を高めたい振付家

［日　時］ 講座:8 月 25 日(火)26 日(水)28 日(金) 20:30～22:00 全 3 回　オンライン実施
グループワーク:2 月 19 日(金)19:30～21:30 ／　20 日(土)21 日(日)13:00～16:00

［会　場］ CONTE-SAPPORO　Dance Center

［講　師］ 平原慎太郎(OrganWorks)

◆C コース／振付家のトータルコーディネートコース

［募集条件］ メンター役となる 2 名の現役振付家から、アドバイスや相談しながら各自の作品を創作していく。また、アーティストとしてのセルフブランディングを高めるため、宣伝資料となる写真、ポートレート、プロモーション動画を写真家、プロデューサーと

共に製作する。途中まではオンラインを活用し、最後の仕上げと撮影は札幌にて行い、北海道外から参加される方には、アーティストレジデンスの申請など全面的にサポートする。

［対象］ ・既に振付家として活動している方　 ・ある程度の実績がある方

［日 時］【講座】 8 月 25 日(火)26 日(水)28 日(金)20:30～22:00 全 3 回　オンライン実施

【オンライン・キックオフミーティング】 9 月 24 日(金)20:30～21:30

【オンライン・ワーク】9 月 26 日(土)メンター：山下、27 日(日)メンター：児玉／11 月 7 日(土)メンター：山下、8 日(日)メンター：児玉／1 月 9 日(土)メンター：山下、 16 日(土)メンター：児玉　　各日 20:30～22:00

【実践ワーク 札幌】2 月 27 日(土)13:00～20:00、28 日(日)10:00～13:00　メンター：山下、児玉

【撮影】 2 月 28 日(日)

［会　場］ CONTE-SAPPORO　Dance Center

［講　師］ 平原慎太郎(OrganWorks)　［メンター］ 山下 残、児玉北斗

［参加費］ A コース：10,000 円／B コース：15,000 円／C コース：35,000 円(写真、動画の制作費込み)

事業の成果など

［事業の成果］

3つのコースを設け、それぞれ対象者と内容を分けて設定したことで事業全体に幅ができた。

A コースは計画よりも多くの方に受けていただいた。オンラインの手軽さもあるが、SNS に向けて発信した動画広告が多くの方に届いたことが要因ではないか。成果としてはほぼ狙い通りで、振付に必要な最低限の知識と応用方法を伝えることができた。22 名参加。B コースはコロナ禍でキャンセルが相次いだが、何とか 3 名が参加してくれて実施できた。少人数になったので一人一人に細やかな対応ができ、グループワークを通して振付の方法論を伝えることができた。

C コースはアーティストステートメントの作成と、新時代の創作について考える時間が中心となり、自身がどういう振付家で在りたいかを参加した 3 名に問い続けた結果、各自の活動が明確になったと感じる。

［事業における工夫］

コロナ禍でそもそも難しかったということもあるが、前年度のショーイングを最終目的とする方法から、ショーイングを無くす方法に変えてみた。結果ではなく過程により重きを置くことで、創作や自身の活動の在り方に集中してほしかった。オンラインではチャットを活用して参加者に課題を与え、書かれたコメントを拾っていった。オンラインでは発言がしにくかったり、質疑応答に時間がかかったりすると感じていたが、効率的に進めることができた。C コースは実務(助成金や広報など)の要素と、アーティストとしての在り方(ステートメント、作品について)のバランスがどちらかに偏らないよう意識して進めた。

［事業の課題］

振付を学ぶには相応の時間が必要だと改めて感じた。特に A コース、B コースはもう少し時間をかけることができれば、より多くの成果を得られたと感じている。今年度は全国から参加者が集まった一方で、北海道内の参加者があまり参加しなかった。講師の方が忙しいので、まとまった日程の確保がなかなか難しい。ショーイングの有効性については、これから改めてゆっくり考えていきたい。

［実施後の効果］

フォローアップに関してはコロナが落ち着いたら、育成講座の参加者を集めて札幌で公演を実現したいと考えている。また、WEB やアーティストステートメントなど、制作面や広報面でサポートが必要と感じており、今後も可能な範囲でサポートしていきたい。前年度に参加した牛島有佳子は、C コースに参加した。昭和レディという団体を率いて単独公演を年に 1 回のペースで実施、400 人規模の観客を動員するようになってきている。

［参加者］ 計 28 名

A コース： 川崎啓史(40 代/男/大阪府貝塚市)、大森弥子(20 代/女/北海道札幌市)、矢藤智子(40 代/女/京都府京都市)、 アミジロウ(40 代/男/大阪府高槻市)、結城仁恵(30 代/女/福岡県)、鈴村英理子(30 代/女/滋賀県草津市)、高田育子(40 代/女/滋賀県大津市)、品川こころ(40 代/女/兵庫県宝塚市)、鈴木純(20 代/女/山形県山形市)、横井めぐ美(30 代/女/茨城県ひたちなか市) 他

B コース： 玉谷ゆかり(50 代/女/東京都新宿区)、鈴村英理子(30 代/女/滋賀県草津市)、鼓代弥生(40 代/女/北海道札幌市)

C コース： 篠崎芽美(30 代/女/東京都)、牛島有佳子(30 代/女/北海道札幌市)、大西彩瑛(20 代/女/東京都杉並区)

参加者の声

◆A コース／振付の方法論についてのオンライン講座

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・振付を作る上でどんなことを考えているのか、言葉として理解できた。(川崎)

・振付や作品の作り方が明確になりました。貴重な機会をありがとうございました。(匿名)

・時間の構成についてとテーマ、コンセプトについて。枠を作っていくこと、振り分けていくこと、広げていくこと、など、何か正解があるように思っていましたが、参加者の様々な考えを聞いて、もっと豊かなものなんだなと思いました。(大森)

・平原慎太郎さんの講座は、情報の収集・分析・実践からのフィートバックを他者と共有することを考え練られ言語化されており、その情報量ゆえすぐに消化できないところはあったものの、これほどわかりやすい講座は他にないのではと思えるほどでした。同時に、深めながら実践していくヒントを大いに得られたと思います。今回 zoom での座学講座をはじめて体験しましたが、自宅という日常にいながらダンスと密に繋がれる機会はとても有難いものでした。(矢藤)

・テーマやコンセプトなどの定義と立て方、それらをどう振付に反映させていくかというのをわかりやすく解説していただき、少し頭が整理された気がしました。
社会性と個性性の対比も面白く、自身の作品の振り返りにも新しい視点が出来て良かったです。(アミジロウ)

・「振付」の時代背景や定義、専門用語の説明など、筋道立てての講義が分かりやすかった。なんとなく知っていたことも、言葉と分析でしっかりと可視化できると、今後の考え方のヒントとしてとても有効になると感じた。講師の方が自身論に偏ることなく、一般論と具体例を織り交ぜて講座を進めてくれたため、俯瞰的に捉えることが出来た。チャットを通してのディベートは面白かったが、早さについていけず参加できないままだった。チャットのディベートはその場での意見発表よりも慣れないと難しいと感じた。(結城)

・今回教えていただいた視点をもとに、過去に自分がつくった作品について分析すること、きちんとアウトプットをすることが大切だと気づきました。そこから、過去の作品をブラッシュアップすることができるんだと思うと、新しいものをつくり続けなければというプレッシャーのようなものもなくなり、作品づくりが楽しみになりました。(鈴村)

・これまで何度か少人数の短い作品を創ったことはありましたが、何の知識もなく、ただ何となく創っていたと思います。すぐに実践できる自信はないですが、ちょっとしたことでも知識として持っていることは大切だと感じましたし、知識を入れた上で他の作品を見ると、ただ何となく見ていたのとは違う景色が見えるかもしれないと感じました。(高田)

・ダンス歴は長くても、振付のやり方を学ぶということはなかったので、視点というか、組み立て方の参考になるアイデアや気付きがたくさんありました。今回は札幌まで行けなくて実際に作品を作ることには参加できませんでしたが、本当はすぐに作品を作ってみるといいのだろうなと思います。関西にいてもズームで学べてありがたかったです。素敵な機会をありがとうございました。関西でも作品を作るワークショップがあるとうれしいです(品川)

・テーマだけでなく、ビジョンやコンセプトを持つことの大切さを痛感しました！また、これまでは、どのように振付けるのが良いのか？と正しさを求めていたように思いますが、振付のアイデ

アや切り口は沢山あって、色んなタイプの作品があっていいのだと寛容な気持ちになり、視野が広くなった気がします。（鈴木）

・まずは、そもそもコンテンポラリーダンスというものに興味があり参加させていただきました。歴史などももちろん興味深く、様々な振付師の方の名前も初めて聴く方々が多く、調べるきっかけやとっかかりになりました。一番プラスだったことは、「自分は何に興味を持っているのか」を知れたことです。漠然に、「ダンスが好き」としてあったものが、視覚的なものなのか、哲学的なものなのか、構成なのか、深堀が楽しかったこと。意外だと思えることがあったことです。皆さまのチャットでの意見も面白くて、なるほどなと納得でき、オンラインでしたが、みんなでしっかり勉強している感じがして、良かったです！（横井）

Q. 書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・私は、振付家志望ではなく、踊りに専門的に関わってはいないのですが、講師の平原さんのカンパニー作品が好きで、どのような考えのもとに作品が創られるのか、また、振付家の方々がどんな思考を持っているのか純粋に興味があり、今回の講座を受けました。オンラインでなければ自分の立場では聞く機会のなかった内容だと思います。実際に聞いてみてダンス作品や他の文化芸術作品に触れる上でもより豊かに観れるようになれそうだと感じました。知識が増えると物の見方、捉え方もより豊かになると考えます。
また、異分野の方の思考回路や構築の仕方を知るのは、自身を顧みて役立つことも多くありました。このような専門家に向けてのプログラムを受講したい方は多岐に渡ると思います。振付家志望の方はオンラインでは物足りないこと、もっと踏み込んだ時間やコミュニケーションが必要かと思いますが、私のような立場の方はオンラインで講座を聞けるというのは敷居も低く参加しやすいと思います。（結城）

・聞いていて本当に楽しかったですしためになりました。ありがとうございます。アーカイブ受講があり助かりました。

・理論を基に実際に動いて実験できると良いなと感じました。（鈴木）

◆B コース／オンライン講座＋グループワーク

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・作品を作る時に、言語化をし、何故それを選択したのかを明確にしていくこと。身体の動きを生み出すやり方。自分の作品を分析できるかの分析力、コンテンポラリーダンスの歴史と、西洋と日本との違い。作品のテーマや社会性を考えていくこと、コンテンポラリーダンスとは時代を表現するダンスであるということ。作り方の一つを例に教えていただき、ですが、やり方は無限にあるのでは、と己で、生み出すことである。人との考え方、意見の違いをどう共有していくか。（玉谷）

・即興においても作品づくりにおいても自分の行為や考えを分析し、言語化して記すことがとても大切なことで、この作業をするかしないかで今後の自分の可能性も変わっていくのだということに気づきました。とても面倒臭い作業ではあるけれど、平原さんはそれを面白がって記していく姿が印象的で、わかりやすい言葉で伝えてくださったので私も「やっていこう！」と楽しみな気持ちになりました。また平原さんは、ダンサーから出てきたアイデアを柔軟に受け入れ面白がってくださるので、ダンサーとしても嬉しかったですし、一緒に作り上げている感じが「幸せだなぁ」と思いました。私もそんな振付家でありたいと思いました。（鈴村）

・展示空間で公演を行う時にダンサーとの共通言語を理解し、意思疎通できるようになりたいと考えて講座を受講しました。普段やっているドローイングや木彫平面（※）との共通項があって面白かったし、動作の反復で描くことや、もとの動きを変形させて作ることは自分の作曲と似た形式だったり・・・ダンスを作ることの垣根がふわーっと柔らかくなった感じがしました。基本的に一人で作っているから、振り付けやフロアを共有して動くのが面白かったです。ワーク中はジャッジされ無いのが心地良くて、普段ダンスをやっていない自分でも「これをやってみよう」と少し考えることはあっても萎縮すること無く、自然に挑戦してみようという気持ちになれました。節目ごとに資料に戻りつつ、今年作品を作って見たいと思います。振付家の講座ですが、展示空間や音楽制作に通じるところが沢山あり実りある時間でした。ありがとうございました。（※木彫平面：木の板に描いて彫刻刀で彫る技法。2010 年より作品の展示を始める。当時は「ぬりぬりほりほり」と呼んでいたが、2015 年ギャラリーの方に「木彫平面」とネーミングしていただきました。）（鼓代）

Q. 書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・今回は 3 日間、短い時間でしたが中身は無駄がなく充実し

たものでありました。照明と音楽に何か具体的な講座など必要があるのではと思いました。（玉谷）

・まずはオンラインで自宅にいながらも講座を受けることができたのがとてもありがたかったです。子育てをしながら講座やワークショップに参加することは今まで諦めることが多かったので参加できて本当によかったです。
本来でしたら短期間で集中的に受けるのがいいとは思うのですが今回期間をあけて冬に実践編があるというのんびりしたペースも良かったです。講座の時間は物足りないくらいの時間でしたが無理することもなく空いた時間を1人で学んだことを振り返れる時間にすることができたので、それも良かったなぁと思いました。（鈴村）

・講座が終わってから、「ポアントを履かなくてもダンスは楽しいなあ」と素直に思えた自分が居てビックリしました。公演もやりたいけど普通に踊る時間もちょっと作りたいなと。動くことのベクトルが変化しました。（鼓代）

◆C コース / 振付家のトータルコーディネートコース

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・今の時代に沿った zoom を使用した作品づくりの面白さの発見、振付家としての自分の見つめ直しが色濃くできたと思います。アーティストステイトメントをきちんと文章化することで自分というものを整理できました。時折この作業は必要と感じました。また、自身の HP 作りや助成金についても学ぶことができ、これからの自分の作品づくり・上演にあたってノウハウを学べたなかなか今までになかった講座だったと思います。私が今まで受けてきたものは最終成果発表として作品をつくるというものでしたが、最終日は自分を語るインタビューの撮影・HP 用の写真撮影でした。このような内容も面白かったです。また講師陣や受講者の皆さんとの交流を重ねこれからもお互い話し合えるような間柄になったような気がします。迷った時は相談できそうで良い出会いでもありました。（牛島）

・作品を制作し発表するプログラムについては今までも何度か経験があったが今回の企画は作品制作に至るまでの「振付家」としてのプロセスを言葉に起こす作業だった。
自分自身を客観的に言葉で表現するという作業はなかなか一人では出来ない作業であり、世界的な振付家を講師とし3人という少人数でのディスカッションは非常に有意義な時間であった。「振付家」としての自身の作家性をリサーチする事で作品に対する理解もより深まるのと同時に、自身が作品を通して社会とどう繋がっているのかが紐解かれ自分のやっている活動の必要性を感じることが出来た。また、今後についても活動を持続し向上させていきたいという意欲が生まれた。（大西）

［講師・メンター　プロフィール］

平原慎太郎
クラシックバレエ、HipHop のキャリアを経てコンテンポラリーダンスの専門家としてダンサー、振付家、ステージコンポーザー、ダンス講師として活動。また、ダンスカンパニー「OrganWorks」を主宰し創作活動を行う。

photo by yixtape

山下残
1970 年大阪府生まれ。代表作に、100 ページの本を配り観客がページをめくりながら本と舞台を交互に見る「そこに書いてある」〈すう・はく〉の呼吸の記号と俳句から引用されたテキストを身体とリンクさせる「せきをしてもひとり」など。

photo: Masahiro Hasunuma

児玉北斗
児玉北斗は、京都を拠点として活動するダンサー／コレオグラファーである。日本でバレエ一家に生まれ、北米やヨーロッパでダンサーとして活動してきた自身の経歴をバックグラウンドに、近代的主体・身体の政治性と、知と権力のシステムとしてのコレオグラフィーの連関について当事者的な問題意識を持ち続けている。

②【名古屋プラットフォーム】

レジデンスアーティスト育成事業 2021

運営：ダンスハウス黄金 4422
（代表：浅井信好）

［プログラムの特色］

●ダンスハウス黄金 4422 ならではの、20 日間のレジデンス型育成プロジェクト。

●贅沢な作品制作スペースと宿泊施設、時間、制作費をサポート。

●照明、音響、制作など舞台に必要な基礎知識を学べる。

［運営団体プロフィール］
ダンスハウス黄金 4422 は 2017 年 6 月に名古屋で設立された。1階にホール、2階にレジデンス施設、3階にスタジオ、4階にアーティストアトリエ、5階にギャラリーを併設。アジアにおけるコンテンポラリーダンスのプラットフォームの役目を担うために、振付家育成事業、ワークショップ事業、公演事業、アーティスト・イン・レジデンス事業、中高生育成事業などを実施している。

精力的に作品発表を行っていく振付家のために、作品の創作だけでなく、舞台芸術に関わる様々な知識を習得してもらうためのプログラム。2 名のレジデンスアーティストを公募で選出後、20 日間に渡り、ダンスハウス黄金 4422 にて愛知県内のダンサーを起用した作品の滞在製作を行った。
滞在制作期間中に、舞台芸術に関わる様々な知識を習得してもらう為の照明講座・音響講座・制作講座（1 講座4時間）を実施。最後に、ダンスハウス黄金 4422 内の劇場にて 2 日間、各 10 名の観客を入れて成果発表を行った。

実施概要

［募集条件］・スタジオスペースの提供
・劇場スペースの提供
・滞在制作期間中の宿泊施設の提供（当館のレジデンス施設を使用）
・1 名分の居住地から名古屋までの往復交通費支給
・制作費として 12 万円（税込）を支給
・照明・音響・制作についての講習を提供

［対　象］　・日本在住者
・2021 年 1 月 5 日～24 日までの全研修プログラム及び、滞在制作や作品発表に参加可能であること
・20 歳～38 歳の振付家
・過去に2作品以上の自作作品を制作した経験のある者
・愛知県内で活動するダンサーを起用した作品創作を行う意思がある者

［日 時］ 1 月 5 日～24 日

［会　場］ ダンスハウス黄金 4422

［講　師］ 浅井信好(制作講座)、福井孝子（照明講座）、椎名 KANS（音響講座）

［スタッフ］ 制作スタッフ：杉浦亜希、鈴木弥生、松浦玲子、岩田舞海

［参加費］ 講座受講料　5,000 円

［公演チケット料金］ 3,000 円

［公募選出レジデンスアーティスト］

・小暮香帆

ダンサー・振付家、30 代、東京都在住/　第 2 回セッションベスト賞、横浜ダンスコレクション EX2015 奨励賞、第 6 回エルスール財団新人賞受賞。

・井田亜彩実

ダンサー・振付家、30 代、長野県在住/　2013 年 文化庁在外研修員としてイスラエルの MARIA KONG に滞在。翌年より、カンパニーメンバーとして、2018 年まで活動。

［成果発表作品　出演者］

・井田亜彩実振付作品「Species ― Transmission ―」　出演：井戸田莉菜、杉山絵理、辻本佳、服部哲郎

・井田亜彩実振付作品「Species―種―」　出演：井田亜彩実、荒俣夏美、豊永洵子、南帆乃佳

・小暮香帆振付作品「路上の宝石」　出演：穴井裕里恵、杉浦ゆら、田中すみれ、山田怜央

事業の成果など

［事業の成果］

本事業の目的は、日本を活動拠点とする若手振付家を育成することと愛知県内のダンサーや振付家にも質の高い育成プログラムを提供することである。20 日間の滞在制作により 2 名の振付家が主に愛知県在住の 11 名のダンサーを起用し、それぞれ 20 分の作品を成果発表した。

［事業における工夫］

20　日間の滞在制作中にレジデンスアーティストに受講してもらった音響講座・照明講座では、成果発表で使う音響を講座内で制作したり、照明講座で学んだことを生かし、実際に成果発表で発表される作品の照明をデザインしたり、キューシートを制作するなどの実践を組み込むことで、振付家が国内外で活躍するために必要不可欠な技術と知識を得るきっかけを与えた。

［事業の課題］

＜人材育成における今後の課題＞

公募の際に広く広報をして、コンテストで受賞歴があり活躍の場もあるアーティストではなく、まだチャンスがない才能のある振付家を選出することが今後の課題である。

＜その他の課題＞

振付家だけではなく、振付家が起用するダンサーに対しても、本プログラムの経験をするだけではなく集中してクリエーションに望むことのできる金銭的な支援策を今後検討していきたい。

［実施後の効果］

ダンスハウス黄金 4422 では、国内外のレジデンス施設やダンスフェスティバルとのネットワークをいかして、育成対象者へのエクスチェンジプログラムや海外フェスティバルへの推薦などを行うことで、フォローアップを行っていく。

［育成対象者に対するスタッフ・共演者等の声］

育成事業であり、発表形態がワークインインプログレスであるからこそ、制作する作品において精度や強度を上げるというよりは、より実験的な試みや新たなチャレンジを振付家には試みて欲しいと感じた。

井田亜彩実振付作品 「Species―種―」

小暮香帆振付作品「路上の宝石」

［参加者］ 計 13 名 （うち出演ダンサー11 名）
井田亜彩実（30 代／女／長野県長野市）、小暮香帆（30 代／女／東京都品川区）
山田怜央（10 代／男／愛知県愛西市）、荒俣夏美（20 代／女／千葉県千葉市）、服部哲郎（30 代／男／愛知県名古屋市）、菅井一輝（30 代／男／愛知県名古屋市）、杉山絵理（30 代／女／愛知県名古屋市）、豊永洵子（30 代／女／愛知県名古屋市）、辻本 佳（30 代／男／京都府京都市）、井戸田莉菜（20 代／女／愛知県東海市）、南帆乃佳（20 代／女／東京都）、穴井裕里恵（20 代／女／愛知県犬山市）、杉浦ゆら（10 代／女／愛知県名古屋市）

参加者の声：

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・まず、新しいダンサー達とのクリエーションは振付家としてのクリエイティブさを磨く非常に有意義な時間でした。参加してくれているダンサーさん達の個性を見抜き、私の作品性に引き込んでいく作業は、私がどんな作品をこれから作っていきたいのか、どんな言葉を投げ掛ければ伝わるのか、ダンサーとのコミュニケーションの仕方など改めて客観的に考えることができました。テクニカルの講座では普段は任せてしまっているお仕事の裏側を知り、色味の相性や照明の当て方による影響、細かい音の中のどの音を強調させたいのかなど興味深い内容でした。
そして制作についての講座ではどこから考え始めるのか、どこまで具体的にイメージするのか、どこからサポートをもらうのか、など目からウロコのお話ばかりで即実践していきたいと思いました。なによりも、このような状況下で作品をクリエーションする場を守ってくださった関係者の皆様に感謝致します。改めて支えていただいているありがたみを感じ、創る幸せを感じました。作品としてもイメージを具現化すること、クリエイティブチームを理解することなど成長することができました。（井田）

・人と人が直接会うことが難しい世の中において、名古屋在住のダンサーたちとクリエーションすることで、踊ることや身体を通して時間を共有することの重要さを再認識しました。15 歳～28 歳の若い世代のダンサーとのコミュニケーションは、それぞれの世代や環境の中で思う社会についても知ることができました。人は一人では生きていけなくて、完璧な人もいない、お互いを支え合っていくものなのだとクリエーションから成果発表での過程で感じました。振付家としての第一歩を踏み出せた経験でした。（小暮）

※以下、出演したダンサーの声
・音の枠がない=自由に踊れる。でも自由だからこその難しさ。空間の大切さ。スローに動くことの難しさ。デュオでの力加減、体重のかけ方。まわりと合わせる難しさ大切さ。どう表現したらいいかを常に考えること。フロアでの手のひらの使い方。足の裏から動くこと。より伝わりやすい説明、教え方など、本当に沢山の事を気づかせてもらい、学ばせていただきました。（山田）

・自身の稽古、クリエーションでは出会えない方々と活動する機会を持てた。異なるテクニックや背景、経歴、また世代を超えたダンサーの方々との活動が今後の自身の課題の発見に繋がり学びになった。（匿名）

・成果発表という場を頂き、こういった状況下のためお客様の前で踊ることが久しぶりでしたが、同じ空間で直接観ていただける公演という機会を改めて素晴らしい場であると実感しました。ステージで照明付きでリハーサル出来たり贅沢に様々なチャレンジを試みることができ、充実したレジデンスになったと感じています。（荒俣）

・井田亜彩実さんの作品にダンサーとして参加しました。この機会があったおかげでまとまった時間を集中して創作に参加できたと考えています。クリエイションの時間が分散していたら得られなかったであろう身体感覚の深い部分にアプローチできました。井田さんの世界観、身体観には深い独自性があり、その点を理解し、身体に浸透させるには時間が必要です。その感覚と身体を持たないと彼女の作品を踊ることはできません。いわば井田さんの作品を踊るためのモードが必要です。そういったモードが得られやすい環境でした。日当もいただいていることから、仕事としてやれているという精神衛生上、健全な状態で参加できました。自分とは違う世界観に深く関わる経験は、これからの創作と踊ることそのものに良い影響を与えてくれることは間違いありません。それは様々な人や作品の影響が混在して今の自分を形成しているからです。（服部）

・同振付家の二作品を同時に動かし（井田作品を二つ同時にクリエーションしていた）、上演に向けてのバランスをとることは難しい課題だった。コロナ対応もあり、様々なパターンを検証できたのは今後のカンパニー運営においてもプラスになった。（菅井）

・身体の使い方、身体を動かす際のイメージをより細かく意識すること。そうすることで身体の可動域が広がることを再確認し、より独特なリズムの振付になることを発見した。（杉山）

・制作場所があることの重要性を改めて感じました。（豊永）

・黄金 4422 での滞在制作に参加しました。12 月の中頃から二週間豊橋でも同作品のレジデンスをしており、断続的に集中して行ったリハーサルは作品への理解やパフォーマンスの向上につながったと思う。
同時に自身の公演の準備も行なっていたため、生活環境とは違うところで集中して制作を行えることは重要だと思った。私自身は、振付家の定義が理解できていないことと志してもいないのでプラスに働くかという点はわからない。（辻本）

・海外で活躍された方の作品の創作過程に実体験をもって関われたことで、新しい考え方を身につけることができました。振り付けや創作の方法には正解はなく、考え方も無限にあるからこそ、様々な振付家の考え方に触れることが 1 番の学びだと思っています。今回また一つ引き出しが増えたことで、今後自身のスタイルを確立する上での蓄積となりました。（井戸田）

・ダンスハウス黄金は、音響・照明設備の整った小劇場・スタジオがありクリエーションやリハーサルのみならずテクニカルも色々と試せたことが良かったと思います。（南）

Q.書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・先行きの見えないコロナ禍でのプロジェクトの継続はさまざまなエネルギーを消耗する。参加者、運営者たちの心身のケアが必要だと思いました。（小暮）

・初めてのコンテンポラリーだったのですが、発見と学びの連続で毎日ワクワクしていました。想像以上に楽しかったです。ありがとうございました。（山田）

・僭越ながら今後の課題を名古屋に在住している人間としての視点からお話しさせていただけるのであれば、黄金 4422 という場所だけでの限界についてです。いったんはショーイングに向けて作品を創作、あるいはアレンジが行われるので、その劇場サイズに様々な事柄を合わせていかなければなりません。今後作品がどのような場所へ向けて羽ばたいていくことが成果なのかということを考えいくと、黄金の劇場サイズでは少し限界があるのではないかという懸念があります。ゆくゆくは名古屋市内の公共施設との提携がとれて、発表の環境により自由度が高い場所を獲得できることが作品の将来性と即応性が高まるのではないかと感じました。もちろんこれは黄金 4422 が素晴らしい環境で、それ以上を望むのならという観点からの話です。また、より力のあるダンサーを使うのであれば日当への予算の拡充も大きな課題になると思いました。（服部）

・緊急事態宣言下での開催となったため企画の修正はやむを得ないと思うが、リハーサルスケジュールにかなりのリスケが生まれたため、その辺りの調整はかなり難航した。プロダクション側の方針や相談は密に出来ると良かった。（会場側だけでなく、企画主催側とも）（菅井）

［講師プロフィール］

照明講座：福井孝子

鹿児島大学、愛知教育大学大学院で舞踊を研究。同時期に邦正美舞踊研究所にて、舞踊史、舞踊美学、舞踊創作等を学ぶ。大学院終了後、（株）若尾綜合舞台に入社。芝居、ダンス、コンサートなどの照明に携わる。27 年在籍後、退社し、現在はフリーランスの照明家として活動している。

音響講座：椎名 KANS

サウンドデザイナー。少年王者棺に音響として所属後、1995 独立。藤田赤目氏に師事。「音」の効果、威力を長年研究している。フリーで活動してきたが 2009 年株式会社ガレッジ（Garage Inc.）を設立し今に至る。演劇、ミュージカル、バンド、映像、舞踊などに「音」を効果的に当てる仕事を主にしている。

制作講座：浅井信好

1983 年生まれ。月灯りの移動劇場主宰。ダンスハウス黄金 4422 芸術監督。舞踏カンパニー《山海塾》を脱退後、文化庁新進芸術家研修制度でイスラエルの《バットシェバ舞踊団》に派遣された後、パリを拠点にダンスカンパニー《PIERRE MIROIR》を主宰。これまでに ARTE LAGUNA ART AWARD 特別賞、グッドデザイン賞などを受賞。ファッションブランドへの作品提供や東信（フラワーアーティスト）、山本基（現代美術家）、渋谷慶一郎（作曲家）、中村達也（ドラム奏者）とのコラボレーション作品なども国内外で発表。現在、ダンサーとしてダミアン・ジャレ＋名和晃平【ＶＥＳＳＥＬ】に参加。これまでに 35 カ国 150 都市以上で公演や展覧会を行っている。

photo by 佐藤良祐

③【城崎プラットフォーム】

Dance Camp クリエイション＆ダイアローグ・ワークショップ

企画・運営：Dance Camp Project
（代表：水野立子）

photo by 城崎国際アートセンター

［運営団体プロフィール］
2017 年より振付家・ダンサーのための育成プログラムを集中した合宿形式で、城崎国際アートセンターで開始。
2017 年度：青木尚哉＜グループワーク＆リサーチ＞　余越保子＜ダンス＆プロセス＞の 2 コースを実施。
2018 年度：ダンサーのための＜実践的ダンス・ワークショップ＞として、A コース：寺田みさこ＜動きの解像度を上げる～バッハ「フーガの技法」を踊る＞、余越保子＜コンテンポラリーダンサーが日本舞踊の古典作品を踊ってみる＞、B コース：康本雅子＜音楽に IN OUT＞、みずのりつこ＜舞踏の身体訓練～金粉パフォーマンス＞を実施した。
2019 年度：クリエイション＆ダイアローグ・ワークショップ by ディーン・モス＆余越保子。全国公募より 3-5 名のチーム編成のアーティストを 4 組選出し、各チームが持ち込んだ作品をダイアローグ・ワークショップを通してクリエイションを行う。

［プログラムの特色］

●ディーンと余越：メンターや参加アーティストとの対話から、作品を解体し再構築する。

●24 時間使える稽古場を持つ城崎国際アートセンターでの合宿形式。（温泉もあり）

●すべての時間を作品のクリエイションに捧げる、アーティストにとって苦しくも至福の日々。

作品をすでにつくり発表しているパフォーマティヴアートの分野（振付家・演出家・映像作家・美術家・パフォーマー・ダンサー）などを対象に、ソロ、デュオ、3～5 名のグループ編成の若手アーティストが城崎国際アートセンターに滞在し、集中した作品クリエイションを行う。期間中、キャリアのあるメンターに依頼し、参加したアーティスト同士にダイアローグを促し、作品プロセスを言語化、既存の手法や価値観を問いながら実験と発明を重ね、作品のクリエイションに必要な参加アーティストのコンセプトやアイデアをより拡張させていくことを目的とする。最終日には、成果発表を行った。
メンターは、ニューヨークより90年代から継続して作品を発表し、指導者としても優れたアーティスト、ディーン・モスと余越保子を迎え、両氏が共に独自に開発してきた創作プロセスに特化した“ダイアローグ・ワークショップ”を行う予定だったが、NY を拠点とするディーン・モスがコロナ禍により来日が不可になったため、ディーン・モスはオンラインでコメントをもらう形式に変更し、余越保子がメインで実施した。申込数は、合計 38 名（ソロ 1 名・7 組、デュオ・7 組、3 名・1 組、4 名・1 組、5 名・2 組）。その中からメンターが、合計 11 名（ソロ 1 名、デュオ・1組、3 名・1 組、5 名・1組）を選抜した。

実施概要

［対 象］・ダンス／パフォーマンス作品を制作している振付家・ダンサー・パフォーマー（ソロ/デュオ/ 3-5 名までのチームでの応募可）
・編成メンバーで制作した未発表の試演作品やアイデア、又は既に上演したことのある作品（約 20 分未満）をこの WS の題材として持ち込み、作品の開発・発展を行う意欲のあるアーティスト。
・3 年以上、活動経験のある方。
・全日参加できる方。心身ともに健康で集団生活ができる方。
・主催者及び開催会場のコロナ感染対策ルールを厳守し、滞在地域の方や他者への社会的マナーの配慮ができる方。

［日　時］1 月 9 日（土）城崎温泉駅集合　10 日（日）～15 日（金）クリエイション＋ダイアローグ・ワークショップ
1 月 16 日（土）ショーイング

［会　場］城崎国際アートセンター

［メンター・講師］メイン・ファシリテーター：余越保子　ファシリテーター：ディーン・モス　（オンラインのみで数回参加、英語／日本語）
オンラインによる舞踊講座　ゲスト：武藤大祐

［参加費］無料
※本プログラムは、教える教えられるという観点を払拭し、キャリアの違いはあるがアーティスト同士のダイアローグを重ねていく場を成立させるために、参加料は無料とし助成金で賄う。自立したアーティストとして、積極的に参加意欲のある方を募集。
［制作］ 水野立子

事業の成果など

［事業の成果］
・日々行われる参加者同士の途中経過発表の作品についてのディスカッションは、クリエイション全般における美学や振付や演出の手法について幅広く行われ、普段、アーティスト同士のディスカッションの機会がほとんどない若手アーティストにとって、有意義な経験となった。
・最終日の Showing に作品の着地点を目指すのではなく、実験的な試みを最後まで挑戦することできた。
・作品についての批評やディスカッションに慣れていなかった参加者が、メンターがキャリアのある振付家として質問を投げかけ、アーティストとして同等の立場で対話を促すことで、参加者が自ら学ぶことができた。
・自分の作品に対する考えを客観的に言説する経験のなかった参加者が、期間中、日々の取組から参加者同士に触発され、言葉にすることに積極的になり、ダンス作品を言説化する必要性を学べ、作品が外に対して開かれたコミュニケーションが必要だということを認識できた。

［事業における工夫 ］
・若手振付家が減少傾向にある現状を鑑み、若手振付家が普段使用できる可能性が低い城崎国際アートセンターで集中したクリエイションを実施すること。
・公募の条件に、自身の作品制作過程の作品を持ち込み、その作品を参加者自らが発展させるという基本方針をつくったこと。
・具体的に先生が振付を指導するのではなく、若手アーティストが自ら作品制作に向き合うための方法論を模索し、参加者同士が作品についてディスカッションできる機会を日々おきるようにプログラムしたこと。
・最終日のショーイングのために作品の完成度を重要視するのではなく、最後まで意欲的に実験し続けること、創作の探求に重きをおくという方針をとったこと。

［事業の課題］
＜人材育成における今後の課題＞
育成事業で講師やメンターとして実質的に育成する立場となる振付家には、自身の優れた創作活動を基本にし、かつ、育成に関わってきた経験の積み重ねが必要とされる。その条件を満たす人材がそれほど多い状況ではないと考えられること。
＜その他の課題＞
城崎国際アートセンターのような複数のスタジオとレジデンス可能な施設は稀であるが、このような環境がない場合、また、参加費を徴収する以外の財源が担保されないと育成事業を実施することが困難であること。
コロナ禍の影響で海外から講師を招くことができなくなること。

［実施後の効果］
昨年度の参加者の活動例
＊敷地理
2020 年横浜ダンスコレクションにおいて「若手振付家のための在日フランス大使館賞」受賞
2021 年「blooming dots」TPAM 公演/横浜ダンスコレクション振付家のための構成力養成講座の参加者に選抜
＊黒田健太
2021 年敷地理作品「blooming dots」出演/児玉北斗振付作品『Pure Core』出演 TPAM 公演
など

photo by igaki photo studio

photo by 城崎国際アートセンター

[参加者/プロフィール]　計 11 名

上本竜平 （40 代 ／男／千葉県）

・演出家・振付家・ダンサー・パフォーマー／2004 年 AAPA(アアパ/ Away At Performing Arts)の活動を開始。2013 年に 北千住(東京都足立区)に「日の出町団地スタジオ」をオープン。

阿部真理亜 （20 代 ／女／東京都）

・演出家、映像作家、ダンサー／2017 年以降、東京芸術大学大学院でメディア映像専攻に在籍。メディアと身体、劇場構造のリサーチ。これまでに、井手茂太、笠井瑞丈、川村美紀子、村本すみれ、田村興一郎の作品に出演。

中村優希 （20 代 ／女／東京都）

・ダンサー／2017 年　日本女子体育大学舞踊学専攻卒業。2014 年～現在、梅田宏明主催「somatic field project」に携わり、作品に出演。これまでに、青木尚哉、井手茂太、上野天志、笠井瑞丈、三東瑠璃、村本すみれ等、多数の振付家の作品に出演。

杉本奈月 （20 代 ／女／京都市）

・演劇・舞台照明・演劇作家、デザイナー。第 15 回 AAF 戯曲賞最終候補作『居坐りのひ』で「大賞の次点」(地点　三浦基)と評され、ウイングカップ 6 最優秀賞受賞。大阪現代舞台芸術協会 DIVE 理事、無隣館演出部所属。N_2(エヌツー)代表。

西井裕美（30 代 ／女／東京都）

・俳優。国立劇場 6 期修了。第 6 回クォータースターコンテストにて BITE 賞受賞。俳優として、スペースノットブランク『ネイティブ』『原風景』(2018)、以降多数出演。

松浦みる （20 代 ／女／東京都）

・俳優。5 歳のとき地元の福岡で演劇を始める。俳優として、シアターグリーン学生芸術祭 vol.11 優秀賞受賞作 / いいへんじ『パパ』(2017)、等多数。

遠藤純一郎 （20 代 ／男／ 東京都）

・現代美術家。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業。2018 年「わたしはクローゼットですが、それもまたいいことです。」展を企画。2019 年より墨田区を拠点に行われるアートプロジェクト「ファンタジア！ファンタジア！ー生き方がかたちになったまちー」の企画・運営として携わり、ワークショップの考案、ファシリテー ションなどを行う。

鶴家一仁 （20 代 ／男／ 東京都）

・英国 Rambert school of Ballet and Contemporary dance 卒。同校在学中に Kerry Nicholls や Mark Baldwin などの作品で主要な役を踊る。卒業後フリーランスとして Pichet Klunchun 演出 「Toky Toki Saru」など多数。

内藤治水 （20 代 ／女／埼玉県）

・お茶の水女子大学芸術・表現行動学科舞踊教育学コース卒業。2015 年から二瓶野枝主宰 Dance Company Nect のダンサーとして 9 作品以上に出演。2016 年よりパフォーマンスグループ Fleur のメンバーとして 3 回の自主公演に出演。他出演作品多数。

長沼航 （20 代 ／男／神奈川県）

・横浜国立大学都市イノベーション学府 Y-GSC 在籍。散策 者/ヌトミックメンバー。 2019 年より 俳優として演劇創作を始める。参加している劇団・散策 者の作品に出演するほか、他団体の作品にも参加。

モテギミユ （20 代 ／女／神奈川県）

・振付家、Dancer。ドイツのバレエアカデミーを卒業後ブダペストダンスシアター に所属。 フリーランスに転向後、Kanami Nakabayashi(現在テキサス在住) とデュオ“Morin”結成。

参加者の声：

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・自身初となる「自作自演のソロダンス」を創り、ダイアローグ WS を通じて他の振付家・ダンサーから生まれた言葉を吸収しながら、最終日に試験的な上演へと至るプロセスを体験できた。そして創作において非常に効果的なプロセスであると、実感した。また作品で使用した映像は都内在住のメンバーとオンラインで協働して創作できたが、現場には自分しかいないため、自身のパフォーマンスを外側から客観的に見てクオリティ

をチェックすることが難しいという課題をいかに克服するかが、ソロダンスにおいて肝要であると（当然のこととは言え）心に刻むことができた。
また、今回の企画にともに参加したメンバーの多くが自身と 10 年以上歳が離れた若い世代で、そのオープンな日常のコミュニケーションの姿勢に、滞在中とても励まされた。彼ら世代とともにある自身の未来に前向きな希望を感じたことも、振付家を志す上で大きなプラスになったと感じている。（上本）

・コンテンポラリーダンスそのものに馴染みがなかったものの、出演者として参加し、単純に多くのことが新鮮でした。例えば、ダンス業界のようなものの中のネットワーク作りの取り組みの一端を見て JDCN そのものに興味を持ったし、プログラムの中のコミュニケーションの方法は普段ダンスに関わらない者としても、今後の活動に活かせると思いました。（遠藤）

・今回参加させていただき、作品を完成させる場ではなく実験を続ける場としての Dance Camp だったことが若手アーティストにとって滅多にない機会だったと感じます。自身の日頃の活動では、既に決まっている上演日から逆算してクリエーションの日程を組むことが多く、時間の使い方から作品の組み立て方・修正の仕方まで、非常に計画的に活動していた気づきがありました。今回、最終日にショーイングの機会はあったもののショーイングのために形にしなくて良かった点や、ぎりぎりまでダイアログワークショップをして作品に対する疑いや揺らぎを保つことができたことで、自分にストップをかけることなく最後まで実験的な活動ができたと思います。また、このような体験ができたのも城崎国際アートセンターだったからこそとも感じます。東京では稽古場が閉まる時間に追われながらの忙しないリハーサルですが、ここでは豊かな自然に囲まれ、設備の整ったホールで 24 時間自由にクリエーションができました。素敵な機会をありがとうございました。（内藤）

・ダイアローグ WS では、身体だけではなく、頭も使ってダンスや作品のことに関わる姿勢と能力の必要性を改めて実感しました。自分の考えを相手に伝えるために言語化すること、相手の言葉をよく聞きよく理解し、その上で自分が何を選択していくかということ。それらを通して、他の方の考えを知ると同時に、関わっている作品や自分がダンスについてどう考えているのかということを、自覚していける機会になりました。今回、参加者の皆さんのほとんどの方が初めましてだったのですが、ダイアローグ内で考えを聞いたり、朝のインプロ時間でそれぞれの動きや踊りを見たりすると、その人の人柄が分かってきたりして、（もちろん全部ではないですが。）とても面白く不思議に思いました。踊りだけではなく、人に対しても興味が出る日々を送りました。（中村）

・振付家として作品制作のプロセスを日々公開していくという過程は非常に新鮮で、毎日どう変化をさせようか、ジャンプしていかなくてはという自身の中で翌日へのタスクをつくっていく日々でした。ダイアローグ WS はパフォーミングアーツを語る上での大切なポイントが現れているような印象で、私が感じている身体はどうしても私的なことになってしまうのでどう社会と繋げていくか、ダイアローグを通じて客観視し、自分と作品とを切り離していくような作業だと感じることができました。同時に許される環境というのは非常に少ないのだなとかんじましたし、ゴールに向かって制作するのではなくてゴールを求められない環境での制作も贅沢で程よい緊張に包まれた滞在でした。また、コロナ禍での参加というのも契機になりました。都内で悶々と部屋にこもり何かを考えていくよりも集中して自然に囲まれながら制作できる環境に参加できたのは非常に充実していました。（阿部）

・創作メンバーと滞在中は寝食を共にするので、生活と創作/人間として生きることと表現することの繋がりについてより意識するようになりました。最終日の発表に対する感想で「東京の闇」という言葉が出ましたが、どのような環境で何を意識して生きているかが、アーティストも観客も大きく影響を受けていて相互作用があると分かりました。非日常に見えて実は日常を強く意識させられる貴重な環境であったと感じます。（松浦）

・作品を制作することは、生きていく上での切実さと結びついていることだと実感しました。作品を作るプロセスを別のベクトルに向かう人たちと共有したからこそ、より形有るものとして認識できました。切実さがあるから作品を作って表現するし、それをどのようにアウトプットするのかは他者によってより鮮明になるのだと思いました。これから先も作品を作るにあたり、自身の孤独に向き合い、他者との関わりの中でより表現を深めていきたいと思います。（西井）

・演劇を専門とするメンバーのみでかかわらせてもらえたことで、わたしたちがふだんのクリエイションにおいてどのように身体そのものへアプローチしていたかを捉えなおすための場となった。（杉本）

・複数のグループとダイアローグをしたり、インプロヴィゼーションの時間があったり、自分のチームを客観的に見れる時間があったので、近頃の自分の興味である、振付家とダンサーのヒエラルキーの問題から、それをフラットにしようとすることで見えるようになったことがあり、チームプレーを続ける上で逃れられないコミュニケーションの問題と、自分の取りたい立場が一つ明確になりました。

また、チームの中や作品を実際に作る時のことだけでなく、制作、舞台技術、プロデューサー、資金、ショーイング、育成の意義、など、作品や、アーティストを取り囲む問題への意識がなかったわけではないのですが、今回のことを経て、よりクリアになりました。前回参加したときとは違う方向にも視線が向いたと感じます。（モテギ）

Q.書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・最終日のショーイングが必須なのか必須でないのかは、参加グループごとに決めるという形ではなく、プログラムの企画趣旨として主催者が事前に決定した方が良いと感じた。理由は、最終日のショーイングを「最低限、観客に観てもらえる形」に整えることに（4 グループあったこともあり）期間中の丸 2 日間を費やす必要が生まれ、創作におけるダイアローグのプロセスのみに集中できなかったことには、不完全燃焼さも残った。また、そもそも「ショーイング（観客への作品発表）は本プログラムの目的ではない」との企画趣旨を説明として受けていたこともあり、自身にとっては作品内容における「観客への配慮」は優先順位を下げてショーイングに望んでいたので、終演後の関係者からのフィードバックで「観客のことを考えなさすぎで良くない」というコメントが創作メンバーに多く寄せられたことには、ショーイングで矢面に立っている当事者としては、理解に苦しむ点であった。（ただし、JCDN の佐東さんから「ここまで観客のことを考えない作品たちを観る体験は記憶にないように思え、あえて良く言えば、新鮮にも感じた」という趣旨のフィードバックがあり、これに限れば、主催者の企画趣旨としての狙い通りの反応があったように思えたので、もし次回、同じような趣旨（若手育成など）の企画を行う場合は、少なくとも最終日のショーイングの際、作品を上演する前に観客に丁寧に企画の趣旨を伝え、「観客にも、能動的な姿勢で作品を鑑賞することが強いられる可能性がある」ということを理解してもらうことが必要ではないかと、個人的には感じている。（上本）

［講師・ファシリテーター　プロフィール］

photo by Miana JUN

メイン・ファシリテーター：余越保子

振付家、演出家、映像作家。広島県出身。2014 年までニューヨークを拠点に活動、現在京都在住。ジョンサイモングッゲンハイム財団、ファンディションコンテンポラリーアート財団のフェローシップの他、ベッシー賞最優秀作品賞を 2 度受賞。ダンスボックス主催国内ダンス留学のメンターを務めるなど、定期的に若手振付家のためのクリエイションワークショップ「ダンス＆プロセス」を開催している。

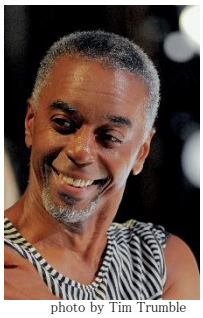


photo by Tim Trumble

ファシリテーター：ディーン・モス

インターディシプリナリィアーティスト。N.Y.在住。ニューヨーク現代美術館、マサチューセッツ現代美術館、ウオーカー・アートセンター、近年はパーフォーマンス・スペース・ニューヨークでマルティメディアのパフォーマンス作品を上演。ドリス・デューク・インパクトアワード（演劇部門）、ベッシー賞最優秀作品賞他を受賞。1999～2004 年 NY 市の先端アートセンターにてダンス＆パフォーマンスのプログラム・キュレイターを務めた。

ゲスト：武藤大祐

ダンス批評家、群馬県立女子大学文学部美学美術史学科准教授、振付家。近現代アジア舞踊史、および振付の理論を研究している。共著書に『バレエとダンスの歴史――欧米劇場舞踊史』（平凡社、2012 年）、『Choreography and Corporeality: Relay in Motion』（Palgrave Macmillan、2016 年）など、主な論文に「デニショーン舞踊団のアジア巡演におけるヴァナキュラーな舞踊文化との接触――インドの「ノーチ」と日本の「芸者」をめぐって」（『舞踊學』第 43 号、2020 年）、「限界集落の芸能と現代アーティストの参加――滋賀県・朽木古屋六斎念仏踊りの継承プロジェクト」（『群馬県立女子大学紀要』第 40 号、2019 年）、振付作品『来る、きっと来る』（2013 年）など。2016 年より「三陸国際芸術祭」海外芸能プログラムディレクター、2018 年より「放課後ダイバーシティ・ダンス」（Tokyo Tokyo Festival Special 13）ディレクター。

④【神戸プラットフォーム】

DANCE ARTIST VIEW2020
「セルフカルチベート企画」

企画・運営：NPO 法人 DANCE BOX
（担当：文）

［運営団体プロフィール］
1996 年発足。拠点劇場〈ArtTheater dB KOBE〉を中心に、ダンス作品のプロデュースやアーティスト･イン･レジデンスのほか、新進芸術家の育成として「国内ダンス留学@神戸」(2012-2017 年度)等を実施。劇場もロビーも、日常的に国内外のアーティストや地域の人の出入りが多く、ダンスアーティストの創造環境を考えると共に、舞台芸術の新しい地域への開き方も探っている。

［プログラムの特色］

●何が自分に必要なのかを自ら考え、自らの育成プログラムを企画する。

●これからのアーティストに必要な、セルフマネジメント力と他者との対話力を育てる。

●劇場でのクリエイションと考察。

育成対象となる新進の振付家等が、創作活動をしていく上で自身に不足していること（創作技術や、様々なスキル、マネジメント力等）を客観的に捉え、現在のダンスシーンも鑑みて、それらに最も有効な自分自身のための育成プログラムを立ち上げる。育成対象者は、ダンサーやテクニカルスタッフ、制作者やアドバイザーなどとの協働も含めた多角的な実践演習を行う。

実施概要

［対　象］ ･活動経験 3 年以上の若手振付家。
･参加条件として、プロジェクト費 175,000 円以内を支給。（1 組あたり）

［日　時］①7 月 21 日　参加者を公募し、事前説明会と参加者によるミーティング
②8 月 4 日　プレゼンテーション　→　参加者を決定
③個別ミーティングを重ねた後、各自プロジェクトをスタート（レポートも提出）
④11 月 13 日　中間報告会の開催を ArtTheater dB KOBE で実施
⑤12 月 28 日　成果報告会の開催をオンラインで実施　⑥　アフターフォロー

［会　場］ ArtTheater dB KOBE、オンライン

［参加者/団体名、活動タイトル］
【ダンス井戸端会議（秋山きらら、他）】「ダンスを外から見つめる･語る（仮）」
【上野愛実、内田結花、中西ちさと、中間アヤカ】「コンポジション実験クラブ（CEC）」
【Alain sinandja】「How to make an artistic folder」
【庄波希（HixTO）】「空間と身体の関係性の研究」

［協 力］ ダンスボックス照明研究会

事業の成果など

［事業全体の成果］
各組、自身に不足していることを客観的に捉え、自身のための育成プログラムを作成し実践できたこと。
事前説明会、プレゼンテーション、中間報告会、成果報告会の 4 回を通じて、同時代を生きる振付家と状況や問題意識を共有する場が持てたこと。また、地域を越えた新たなダンスコミュニティが生まれたこと。

［個別の成果］
https://dance-it-is.com/program2020/db2020/ ページに、各レポートを掲載しています。

【ダンス井戸端会議】
WEB サイト上に「ダンスを外から見つめる・語る」場を作成。トークイベントを 5 回実施し、レポートを執筆し、今後につながるダンスを言葉で届ける媒体をつくった。 https://idobata.space/

【上野愛実、内田結花、中西ちさと、中間アヤカ】「コンポジション実験クラブ（CEC）」
＜創作＞ではない＜振付の土台＞のスキルアップと、振付家同士の対話の場を継続的に考える場を持てた。

【Alain sinandja】「How to make an artistic folder」
活動するために必須の＜artistic folder＞づくりを入口に、新たなチームでのクリエイションを通じてプロジェクトマネジメントを学んだ。

【庄波希（HixTO）】「空間と身体の関係性の研究」
劇場空間をフルに活かし、美術・照明・モノ・衣装と身体の関係を探り、実験を重ね演出のスキルを高めた。

［事業における工夫］
・対象を既に活動を行っているアーティストに限定し、参加者の問題意識を共有できるようにしたこと。
・4 組それぞれが、自分達のことを言語化し、他者の考えや進捗状況を共有し、相互に刺激を受け合う場をつくったこと。
・育成対象者が、自分で考えて作ったプログラムを実践することにより、今後も自立して実践していく力を持つことができるようにしたこと。
・参加者に当事者意識を持ってもらうため、言葉を引き出すプログラムを実践したダンス井戸端会議メンバーに成果報告会のディスカッション部分の進行を担当してもらったこと。
・より濃密な内容で各プログラムを実施するため、劇場を日数をかけて使用したこと。

［事業の課題］
＜人材育成における今後の課題＞
育成の成果を評価にするために、作品を発表するなどアウトプットされたもので評価されることが多いが、今回発表を目的にしないことでより一層充実した育成プログラムを組むことが出来た。また、短期のアーティストの育成だけではなく、数年にわたり長い目でアーティストの成長・活動をサポートする、継続性のある育成の視点も必要であると感じている。成果報告会以降も個別に今後の活動や展開について話し合いを行っている。

［育成対象者に対するスタッフ・共演者等の声］
・次代を担う 20 代 30 代のアーティストの活動における問題や、現在のダンスを取り巻く環境に抱いている思いをダイレクトな声として聴くことができた。コミュニティは場にひもづき、そのコミュニティを育むのは継続である。リサーチや実験・探求には予算がつかず、アーティストが発表ベースでしか予算を獲得しづらい時代に、深い思考と持久力のあるアーティストを育成することはとても必要である。

【Alain sinandja】「How to make an artistic folder」

【庄波希（HixTO）】「空間と身体の関係性の研究」

【上野愛美、内田結花、中西ちさと、中間アヤカ】「コンポジション実験クラブ（CEC）」

【ダンス井戸端会議】

［参加者］ 計 20 名

「ダンス井戸端会議」 秋山きらら（20 代／女／東京）、白井愛咲（30 代／女）、ほかダンス井戸端会議メンバー

上野愛実（30 代／女／京都　振付家・ダンサー）

内田結花（30 代／女／大阪　振付家・ダンサー）

中西ちさと（30 代／女／大阪　振付家・ダンサー）

中間アヤカ（20 代／女／兵庫　ダンサー）

Alain sinandja（30 代／男／トーゴ出身兵庫在住　振付家・ダンサー）

庄波希（20 代／男／兵庫　振付家・ダンサー）　ほか HixTO メンバー

参加者の声

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・私たちダンス井戸端会議では、「自分たちが面白いと思う活動を続けていくために、何をどうやって会得していけばいいのだろう」ということをよく話題にあげています。まさに、セルフカルチベートの手段をメンバーそれぞれが探っている状態だったのですが、ダンサーではない分野外の方をゲストにお招きしながら、対話を重ねていくプログラムを企画し実施していく中で、「自分たちはどういった思考を持っていて、何を目指したいのか、または目指したくないのか」ということを各々が相対化し、言語化し、アーカイブすることができました。また、セルフカルチベート企画に参加されている他の参加プロジェクトとも定期的な共有の場がひらかれ、今年はオンラインでの参加も受け付けていただいたおかげで、ダンス井戸端会議の活動が東京を飛び越え更に染み出していくようなことが実現でき、活動をブーストする機会となりました。（秋山）

・前々からダンサーでもあり振付もする人たちが集まってダンスについて話したり、実際に踊って実験することに興味があった。誰か 1 人が全体を仕切って他の人がそれに習うのではなく、それぞれの考えを話すことに時間をかけて、多様な視点から選んだテーマを深く掘り下げることを基本とした。今回のカルチベート企画はそれを可能にし、さらに db で行うことで繋がった人や出来たこともあり、db が今まで培ってきた人脈やイメージ、定期的に集まれる場所があったことに大いに助けられた。またメンバー以外にも幅広い年代のアーティストに参加してもらい、一緒に見ること・踊ることでしか出来ない対話はとても貴重な時間になった。外からの視点が加わることでより丁寧にダンスが起こる瞬間を模索した。どの参加者の方も真摯に取り組んでくださり、そういう場をみんなで作ることができたのはこの企画を続ける上で大きな励みとなった。（上野）

・今回、一度立ち止まってダンスを振付するとは何か？を僕自身が考えて実験する機会となり、贅沢に劇場を丸一日使わせて頂きトライアンドエラーする事で、何よりもダンスの可能生とパワーを吸収する事が出来ました。（庄）

Q. 書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・実際に3ヶ月間で 20 日ほど集まった。他にも仕事を持つ中、短いスパンでこれだけ集まるのは少し大変だったが、内容はとても充実したものになった。新たな企画も生まれそうになったところで終了となったので、3ヶ月と言わず定期的に集まることが出来れば作品発表にも繋がっていくように思う。現在これ以上に時間をかけて作品制作をすることは様々な面から難しいことではあるが、それだけ労力をかけないと出来ないこともある。せめて場所さえあればなんとか出来るところもあるので、この先があるとするなら、まずは場所の支援をしてもらえると本当にありがたい。成果がすぐに現れる企画だとは言いづらいが、今の私たちには根気強く続けていく持久力が必要だ。いろんな立場の人に理解してもらえるよう活動を続けることで、世代の隔りを超えて、アーティスト同志のコミュニケーションがとりやすくなる環境を作り、それがコンテンポラリーダンスを活気づけていくことになればと思う。（上野）

・空間づくりや、外側からの振付を探求する時間はとても重要で貴重な時間となりました。ただ成果発表として生でクリエーション風景を発表出来なかったのが、とても残念でした。この様な機会を頂けた事を凄く感謝しています。ありがとうございました。（庄）

⑤【広島プラットフォーム】

ダンスアートプロジェクト！！

企画・運営：FREE HEARTS
（代表：島村陽子）

［運営団体プロフィール］
1992 年より地元ダンサーのレベルアップと交流を目的に、国内外のダンサーを定期的に講師に招き、ダンスワークショップを開催。現在は演劇やミュージカル、舞踏ヒップホップなど、ジャンルを問わず、幅広く身体表現活動に携わり、行政主催のダンスイベント制作部門の協力、ダンス公演の提案なども、地元広島にて行っている。

［プログラムの特色］

●これまでダンスを踊ってきたけれど、自分ではダンスを創ったことのない人大歓迎。

●ダンスを創るためのヒント、創ることの喜びや難しさを体験する 6 日間。

●世界的な振付家も、はじめの一歩はみな同じ。

オリジナリティー溢れる作品づくりの機会(場)を提供することにより、今後の若手振付家・ダンサーの創作意欲を高めることを目的とし、ダンスを「創る」面白さを伝える 6 日間のプログラム。
昨年に続き、第一線で活躍する振付家の近藤良平氏を講師に招き、ワークショップ・レクチャーを通じて、創作プロセスを学ぶ。受講者は講師より課題を与えられ、各自創作に挑み、最終日には公開による成果発表(ショーイング)、作品解説も含んだアフタートークを実施した。

実施概要

［対 象］ ・ダンスなど舞台経験豊かな若い方(概ね 30 歳まで、小学生は除く） ※応募多数の場合は書類選考あり
［日　時］2 月 9 日(火)～14 日(日)
ワークショップ 2 月 9 日 (火)、 10 日(水)、 11 日(木)、12 日(金) 18:00-21:00
2 月 13 日(土) 13:00-21:00、14 日(日) 10:00-12:00
ショーイング　2 月 14 日(日) 14:00-15:00 （終演後アフタートーク）
［会　場］広島市安芸区民文化センター
［参加費］受講料：一般 5,000 円　学生 2,000 円　ショーイング：無料
［講　師］近藤良平
［スタッフ］照明：福田哲也、柏原孝祐(ケアー） 音響：景山義彦(サウンドオフィスクロスロード） アシスタント：杉浦和弥
運営：島村陽子、岡本忠久　制作：竹内ひとみ、友重里香、杉浦和弥　チラシデザイン：MAKOTO
［共　催］広島市安芸区民文化センター

事業の成果など

［事業の成果］
広島県を中心に高校生から社会人までの10名が参加した。育成対象者のそれぞれのダンス経験やジャンルも異なる中、他者への振付を考える・踊ってみることは参加者にとって新たな刺激となる経験になった。
最終日には、ワークショップでの制作の過程を体感した上で、実際の舞台同様の照明や音響を使用したショーイングを行い、参加者は舞台上でどのように見えるのかといった客観的な視点を持つことができた。6 日間という限られた時

間の中ではあったが、今回、育成対象者を 10 名以下に限定したことで、講師が短期間で一人ひとりとじっくり向き合うことができ、昨年よりも育成対象者自身に創作させる時間を多く取ることができたため、より個々の体験の充実につながった。
アフタートークでは、育成対象者一人ひとりがこの企画を通じて得た学びを自分の言葉で語り、自身の振付への思いの変化など、振付に対する意欲の向上が垣間見えた。この一年、育成対象者自身も、ダンス発表の場はほぼ無く、この企画を通じて、人前で踊る楽しさやダンスを通じて人とつながる喜びを再認識できたようだ。

［事業における工夫］
次世代ダンサーあるいは振付家育成を目標に、地元を中心に若い人材の参加を広く積極的に呼びかけた一方で、コロナ禍での開催となり、密を避けるため、育成対象者を 10 名以下に限定した。また育成対象者の大半は 10-20 代であり、ダンス作品の創作経験がほぼ未経験の者も想定し、「振付＝難しい」という固定概念を取り払うため、昨年に引き続き、講師に近藤良平氏を迎え、「自由に」創作することを目的としてこのプログラムを計画した。またワークショップだけでなく、最終日には公開による成果発表（ショーイング）、作品解説も含んだアフタートークを実施することで、今回の企画の意図や育成対象者の成果を来場者と共有できる場を設定した。

［事業の課題］
＜人材育成における今後の課題＞
地方には首都圏や関西圏同様のダンス環境が揃っておらず、個々の表現者としてのダンサーを育成する土壌があるとは言い難い状況である。またそういった地方では個々のダンサーは孤立化しており、活動を継続することが困難である。
ダンサーは技術を継続するために、スタジオや教室に所属していることが多いが、就職や生活環境の変化によって、そこから離れてしまうと孤立し、踊りを継続していくこと事態が難しくなり、作品を創る環境を得ることが難しくなる。そのようなダンサーがダンスを軸とした人とのつながり・ネットワークを構築し、自らの創作活動を継続していけるようサポートし、良質な機会や情報を提供し続けることが今後の課題だと考える。
＜その他の課題＞
例えば国内外で活躍するダンサーを招聘し、今回のようなダンス事業を企画することで首都圏や関西圏と変わらない、踊る「場」があることを発信し、進学や就職等で地元を離れていても、いつでも戻ってこられるよう事業を継続していく必要がある。

［育成対象者に対するスタッフ・共演者・協力機関・関係団体等の声］
・アーティストたちがともに創る 6 日間が、彼らにとって成長の機会となったのは間違いありません。コロナ禍により活動が制限された1年ではありますが、場が限られている地方であるからこそ、こういった機会の必要性と場/つながりの継続性を改めて感じました。（竹内ひとみ　制作）
・今回は新型コロナウイルス感染症の影響で開催が危ぶまれましたが、なんとか開催をする事ができました。集まった参加者も積極的にいろいろな事を吸収しようと受講しており、とても生き生きとした姿を見て、実際に現場で体験してもらう事の重要性をあらためて認識し直しました。（岡本忠久　広島市安芸区民文化センター）

［実施後の効果］
参加者の中には昨年度に引き続いての参加となる者もおり、前回の経験を踏まえ、ナビゲーターの指導によりダンサー・振付家としての成長が深まったように感じました。今後も成長を促すため、参加者による振付作品の機会を創出すると共に、創作カリキュラムを継続的に行っていく。

Photos by MAKOTO

［参加者］ 計 10 名

玉野日向子(20 代/女/東京都国分寺市)、坂本知世(20 代/女/広島県呉市)、加用舎那(10 代/女/広島県広島市)、高山太一(20 代/男/広島県広島市)、高橋雅輝(10 代/女/広島県広島市)、中本妃世里(10 代/女/広島県三原市)、善岡宏和(30 代/男/広島市)、宮地綾(20 代/女/広島県広島市)、光廣ひか里(20 代/女/広島県)、北川すみれ(10 代/女/山口県)、井戸咲良(20 代/女/大阪府)

参加者の声

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・この 1 年、人とのオンラインでのやりとりが増え、創作の上でも直接人と会って何か作る、ということがとても新鮮に感じました。この 6 日間、人と直接触れ合い、一緒に考え、作る時間は、本当に充実していました。良平さんが何を持ってきても受け入れてくれる体制で臨んでくださったので、何を作ってもいいんだ、自分の思うように表現していいんだ、と思い楽しく振り付けを作ることができました。簡単な動きでも、ニュアンスやイメージを伝えてみんなで動くことで振り付けになるということ、「無意味」を大切にするということが印象に残っています。(玉野)

・これまで、ダンスは先生の振り付けを踊るもの、という意識が強く、自分自身が振り付けをする機会はほとんどありませんでした。今回、振付を学んだことで、これまで自分自身がダンサーとして、振付について、まったく意識せず踊っていたのだということを実感しました。どんな動きにも振付家の意図があり、それを踊り手は汲み取る必要があります。そして振付家は、ダンサーにその意図をうまく伝え作品にする工夫をしなければならないということがよくわかりました。私にとってほぼ初めての振付をする機会でしたが、自分の考えを表すこと(それがどんな形であっても)が振付であり、ルールなどないのだなと思いました。堅苦しく考えず、もっと積極的に振付に関われば良かったと後悔をするほどです。特にコンテンポラリーは自分を直接、よりリアルに表現できるダンスのジャンルだと思うので、コンテンポラリーの振付をできたことも良い経験になりました。(坂本)

・振付は、難しいというイメージがあったのですが、このプログラムに参加して、もっと自由に考えていいことを知りました。そして、振付するにあたって様々な方法があることに驚きました。何もない状態からイメージして、そのイメージに合う動きを作ったり、音楽を聴いて曲に合わせた動きをしたり、半分遊び、半分運動くらいの気持ちで動きながら、そこから出た動きを作品に取り入れたりなど、振付する方法は沢山あって、気楽に楽しくやれるなと思えました。(加用)

・今まで振付をする時は頭を抱え、追い詰められていましたが、今回のプログラムに参加して、もっと楽しく気楽に考えていいんだと思えるようになりました。振付のことだけでなく、1 時間の舞台の流れを作ることや場の繋ぎ方なども先生を見て学ぶ事が出来、大変勉強になりました。(光廣)

・振付の自由度や振りを付ける事に対するアプローチの仕方など、様々な角度から振付に向き合うことが出来て良かった。(高山)

・先生は勿論、参加しておられた皆さんの知識や向上心に感嘆しました。自身もこれからますます頑張ろうと思いました。(高橋)

・振り付けに対して、すごい不安だったりしたけど、今回のプログラムに参加してこんなに振り付けって楽しいものなんだと気づいて、振り付けについてもっと学んでいきたいと思うようになりました。また、舞台上で声出したりとかしたことがなかったので、すごい刺激的でとても楽しかったです。(中本)

・振り付けを考える時に身体的なことを考えていましたが動きのきっかけとして自分が普段やっている動きや擬音からヒントを得て作る方法を学べたのでとても楽しかったです。(善岡)

・今まで振り付けを何度かしたことがありましたが、「かっこよさ」や「難易度」を重視して、どうしても「正解はどれか」を探してしまい、あまり納得できる振りができないことが多くありました。でも今回参加してみて、1番強く感じたのは【振り付けに正解不正解はない】ということです。私自身、小さい頃からバレエ・ジャズダンスをしており、その中での動きで収めてしまって、それ以外の振りは【振り付けとして成り立たない】と無意識に感じていたんだと思います。でも参加者の皆さんが私が思いつかない振りをされていたり、自由に堂々と表現されているのを見て、

今までの考え方を変えることができました。どんな動きでも【振り付け】として成り立ってるし、曲・リズムに合わせて踊るということだけが振り付けではないという発見がありました。参加者のみなさんそれぞれの個性を生かした振りを見ているうちに、自分が好きなように考えて体を動かし作品を作って、あとは【観てくれる人がどう感じるか】それを楽しむという考え方もできました。自由に、自分の思ったまま表現するということはとても楽しかったです。また、【無意味な動きをする】という難しさと楽しさも知ることができました。自分では意味がある動きでも、見ている人には無意味に見えたり、その逆もあって、そういったことでも、やはり「正解不正解」はないんだなと思いました。とてもたくさんの刺激を受けた6日間でした。ぜひまた参加したいと思いましたし、今後も振り付けを積極的にしてみたいと思います。（宮地）

Q.書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・お客様を入れた本番は無観客の映像収録とは違い、そこに見てくれる人がいて、生の反応が帰ってくるからこそ、その瞬間しかできない作品が出来上がっていくのだなと実感しました。（玉野）

・演者主体で振付ができたことがとても楽しかったです。しかし、その中で良平さんによる構成や振付を体感できたことで、改めてその難しさと良平さんの偉大さも実感出来ました。私たちのバラバラな個性的な作品をひとつの舞台にまとめてくださり、とても不思議な世界観の他にない舞台にでき、面白かったです。（坂本）

・とても楽しい企画でした。広島にいるとなかなかこのような機会が少ないため、貴重な経験をさせていただきありがとうございます。今後もこのような企画に参加してもっと自分を磨きます。（加用）

・少ない参加費でここまでの経験をさせていただけたこと、驚きと感謝の気持ちでいっぱいです。広島で、このような機会を作っていただき、ありがとうございました！（光廣）

・もっと時間が欲しいです。（善岡）

［講師プロフィール］

近藤良平

振付家・ダンサー、コンドルズ主宰。NHK「サラリーマン NEO」、「からだであそぼ」などに振付出演。同「てっぱん」オープニングの振付も担当。第四回朝日舞台芸術賞寺山修司賞、第 67 回芸術選奨文部科学大臣賞、第 67 回横浜文化賞受賞。立教大学などで非常勤講師としてダンス指導。現在、NHK エデュケーショナルと共に 0 歳児からの子ども向け観客参加型公演「コンドルズの遊育計画」や埼玉県と共に「近藤良平と障害者によるダンス公演」ハンドルズ公演など、コンテンポラリーダンスの社会貢献に取り組んでいる。ペルー、チリアルゼンチン育ち。愛犬家。

Photos by MAKOTO

⑥【札幌／京都クリエイティブパートナー】

建築とコンタクト（京都―札幌）

運営：C³/Contact Choreograph Crossing
制作：一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメント
（担当：坂本公成・森裕子）

［運営団体プロフィール］
京都を拠点とするコンタクト･インプロヴァイザー(以下 CI)･アーティストと札幌を拠点とする CI アーティストが 2018 年より地域間交流を開始。今回の地域間交流を促す人材育成事業の実施のために Contact、Choreograph、Croosing をキーワードに C3(シースリー)を結成した。

［プログラムの特色］

●世界中のダンサーにとってのメソッド「コンタクト・インプロビゼーション」を知る。

●建築からダンスが生まれる?!

●札幌と京都の二地域での開催、今年はショーイングではなく動画配信。

―建築と出会うダンス― コンタクト･インプロヴィゼーション(以下 CI)は身体と身体の対話のダンスであり、個々の振付家の言語を豊かにすると同時に、家屋や建築など「空間」を理解し利用して行くのにも役立つメソッドである。この事業では広義の意味で CI を捉えて、振付家の空間への理解を促すと同時に、独自の言語を発展させる事を目的としている。京都では古民家をリノベーションした和洋折衷建築「町家ホテル YANAGI」を会場に、札幌では廃校になった校舎を活用した「あけぼのアート＆コミュニティセンター」の建築を対象にワークショップ＆クリエイション、最終ショーイングや動画の撮影を行った。

実施概要

［対象］ ダンス歴 3 年以上振付家志望のダンサー、建築やサイトスペシフィク･アートに興味のあるアーティスト

［日時･会場］

◆京都プログラム

【パートナリング WS】(5 回) 10 月 9 日(金)18:30～20:30 会場 A 10 日(土)11:00～13:00、14:00～16:00 会場 A 11 日(日)11:00～13:00、14:00～16:00 会場 B

【現代建築家による建築を読み込む WS】(1 回) 11 月 14 日(土)13:00～15:00 会場 C(以下同)

【建築と関わりながらのクリエイション】(5 日) 11 月 14 日(土)16:00～20:00 11 月 15 日(日)11:00～17:00 11 月 21 日(土)～23 日(月･祝)11:00～17:00 【動画撮影】11 月 23 日(月･祝)15:00～17:00

会場 A:京都市北いきいき市民活動センター B:京都市左京東部いきいき市民活動センター C:町家ホテル YANAGI

◆札幌プログラム

【コンタクト･インプロヴィゼーション WS】(4 回) 10 月 28 日(水)～30 日(金)19:00～21:00 31 日(土)13:00～15:00

【建築と関わりながらのクリエイション】(4 日) 10 月 31 日(土)16:00～19:00 11 月 1 日(日)10:00～18:00 2 日(月) 12:00～21:00 3 日(火･祝)10:00～18:00 【限定公開ショーイング】11 月 3 日(火･祝)16:00～

会場:あけぼのアート＆コミュニティセンター

［講 師］坂本公成＋森裕子(Monochrome Circus)、三野貞佳(アリアナ建築設計事務所)

［参加費］10,000 円(通し)

［スタッフ］◆札幌 制作:micelle 映像撮影:株式会社ラッカ

◆京都 制作:ダンスアンドエンヴァイロメント 写真撮影:菱川裕子 映像撮影:奥田ケン

［協 力］さっぽろ天神山アートスタジオ(札幌)、あけぼのアート&コミュニティセンター(札幌)アリアナ設計事務所(大阪)

事業の成果など

［事業の成果］
札幌では元小学校だった校舎を会場に行い、CI のワークショップを行う事で CI のメソッドの共有が図られると共に、参加者 5 名が元小学校内をロケハンし、3 つの小作品を生み出した。内1名は京都でのワークショップ参加者で、京都―札幌のダンサー間での交流が図られるという副産物もあった。特に建築空間の動線や空間の特性を読み込むという点においては、元小学校の「記憶」といった Keyword や「知識の場」という Keyword が見出されて、参加者それぞれの独自の言語が少々発展した。京都では町家をリノベーションしたホテルを借り切り、設計を担当した建築家による講義をまず初めに行なう事で、「建築家」の視点から見た空間認識を具体的に知る機会が出来た。参加者8名が群舞、デュエット、ソロの形で8作品の創作を行い、それぞれこれまでに自身が持っていたアプローチとは違う切り口と身体言語を探しながらショーイング（映像撮影）まで持っていく事が出来た。

［事業における工夫］
札幌プログラムにおいては、指定管理者のスタッフに校舎を案内して貰い、建築への理解を深める契機とした。また撮影&ショーイング後に観客も交えてのフィードバックセッションを行い、それぞれの作品の「言語化」を共同で行い、豊かな言語空間が形作られた。京都プログラムにおいては実際の建築物を設計した建築家に現場でレクチャーを行なって貰う事でダンサー・振付家とは異なる視点を導入した。コロナ禍における WS という事でショーイングを避け、映像撮影をあらかじめ意識した形での創作を行ったが、京都プログラムでは、現場での創作初日からほとんど全日カメラマンが参加してくれて、より「映像撮影」というアウトプットを意識した創作活動が行えた。

［事業の課題］
＜人材育成における今後の課題＞
参加者独自の身体言語を生み出すところまで届く事業とするには、相当分厚いプログラム編成が求められる、というところは札幌、京都のプログラム両方で言える事だろう。札幌では建築家によるレクチャーが出来なかったが、そういった他ジャンルの視点を導入する事は非常に有意義だと思われる。
＜その他の課題＞
コロナ禍において、北海道では参加者の募集に苦戦した。身体的接触を避ける状況でのワークショップには細心の注意が必要だが、京都、札幌という 2 都市間で CI の普及度や認知度が違うということもあるので、普段からの普及や認知度の向上が求められる。

［育成対象者に対するスタッフ・共演者・協力機関・関係団体等の声］
・「建築とコンタクト」、札幌プログラムはコロナ禍という事もあり、参加者は想定よりも少ない札幌から 4 名、京都から 1 名の計5名で行われた。劇場ではなく建築を舞台として利用するなど、コンテンポラリーダンスの創作機会が多くない札幌では稀有な創作ワークショップとなり、他地域からの参加者がいたことにより創作における文化的交流がショーイングの作品の多様性にも表れていた。今後はワークインプログレス等を経た長期間の制作や地域間交流もより活発になれば更に事業として有意義になると感じた。（札幌スタッフ）
・結論から言うと、施設としての評価は“非常に有意義であった“という一言に尽きる。「何の変哲もない一般的な元学校」の当施設で良い作品がクリエイションできるのか、特徴的な建築物と比べて拡張性や歴史的背景が不足しているのではないかという懸念は、見事に裏切られた。「何の変哲もない」場所から逆に広がる発想の柔軟さ、学校のシチュエーションの活用。その場からインスピレーションを受けて生み出された作品は、見事に CI と建築物の融合体だった。今回は残念ながら映像収録のみに留まったが、機会があればより多くの人が行き交う中でのクリエイションをぜひ見てみたいと思う。（あけぼのアート&コミュニティセンター）

［実施後の効果］
事業によって生まれた 11 作品は全て映像で収録し、YouTube 上にアップし参加者間で共有視聴し、この後のフィードバックに充てていく。また優れた作品は、一般に公開しアピールしていくと同時に、育成者の更なるステップ・アップとなる上演を後押ししていくと共に、WS の機会などに積極的に参加してもらい、取り組みを継続していってもらう。

Photos by Yuko Hishikawa

[参加者] 計 13 名

[札幌プログラム] 成田愛花(20 代／女／北海道 俳優･ダンサー･舞台歴 10 年以上)、平尾拓也(20 代／男／北海道 ダンサー･舞台歴 6 年以上)、津川りゅう子(60 代／女／北海道 ダンサー･舞台歴 40 年以上)、若松由紀枝(60 代／女／北海道 ダンサー･舞台歴 40 年以上)、門戸大輔(40 代／男／京都市 ダンサー歴 3 年以上)

[京都プログラム] 林南々帆(10 代／女／京都市 ダンス経験 10 年以上)、森本圭治(20 代／女／大阪市 ダンサー歴 5 年以上)、上田愛華(10 代／女／京都市 ダンス経験 10 年以上)、板倉佳奈美(50 代／女／京都市 ダンサー歴 20 年以上)、竹之内芙美(30 代／女／京都市 ダンサー歴 10 年以上、デザイナー)、杉崎未侑(20 代／女／大阪市 ダンサー歴 5 年以上)、玉谷ゆかり(50 代／女／名古屋市 ダンサー歴 20 年以上)、門戸大輔(40 代／男／京都市 ダンサー歴 3 年以上)

参加者の声

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・パンデミック発生以降、疫学的な知見から「社会的距離」を保つことが要請されるようになり、都市における空間の利活用についても、その影響は甚大で、劇場や映画館、ライブハウスといった場所がどのような意味合いにおいて、どのような経営が成り立つのか、各地で模索が続いている。そのような状況下において、『建築とコンタクト』を受講させていただき、身体を用いた芸術はどのような形式によって可能か、どのような意味を社会に対して持ちうるのか、といった問いについて以下のような内容を検討することができた。

1. 劇場の外で、小人数の観客に向けた作品を展開することは可能である。いうまでもなく、少人数に向けた作品は、まず、感染対策の意味合いから有効である。

2. 現代のバーチャルな空間には、個人が見たいものしかみえなくなってしまい思想的に孤立してしまう危険性のあることが指摘されている。身体芸術の作品は、生々しい他者性を体験させるものとして機能しうるが、少人数の観客に向けた作品であれば、双方向性を持たせて、丁寧なやりとりを含めることが可能である。思想的な孤立化を防ぐ手立てとして、身体芸術は有効であり、都市の安全保障の機能を担っているといえる。

3. 地域の人々に対して、身体芸術を活性化させていくためには、芸術を活性化させるような公共的なセクターが必要である。今回の会場となった「建築」は、このようなセクターであった。この「建築」は「劇場」ではないため、そこに現れる身体芸術も、2020 年までの芸術のあり方と少し異なっていたかもしれない。ただ、誰もが身体を持っていて、ほとんどの人は、適切なアドバイスを受けながら、小さな作品を作ることができ、お互いの作品を楽しむことができる。今回のワークショップに参加して、これからの振付家の役割は、そのような場の生成に関与することであるように思った。(門戸)

・はじめましての人と、0 から何もないところから、しかもコンタクトの作品を作る、初めての経験でした。どんな内容にするか、モチーフは何か、とても悩みました、うまくいきませんでした。「とりあえず動いてみよ？」相方がぽろっと言ってくれたのが、創作のスタートでした。実際にコンタクトをしながら動いていくうちに、どんどんできていく感覚は、とてもわくわくして、さっきまで頭でたくさん考えていたことも、勝手に浮き上がってくる感覚はとても新鮮でした。何もないところから作る…でもよく考えてみると、身の周りには創作の原料がごろごろ転がっていて、相手の身体、舞台(旧校舎の図書室)、社会、環境。自分の周りの環境は、創作する上で決して無視できないことで、そことどう影響し合いながら、面白いものを作るか。もちろん内容とかモチーフとか、作品を作る上で大事ですが、それだけじゃないことに気づけたことが、今回の一番大きな収穫です。(成田)

・ダンス作品を作るための方法論を知ることができ、踊ることだけでなく、踊ることから何かを始められることが分かった。特に、実際にクリエーションを行うことで、踊りを作る中で、色んな選択肢があり、どれを選ぶかによって、全く違う印象のものが出来上がるということを実感でき、創作の楽しみを感じられたと思う。また、今回のテーマは建築とコンタクトであったが、コンタクトによって、人だけでなく外のものごとと関わっていけることに気がつけたのは、ダンスを続けていく上で、大きな支えになる気がした。(平尾)

・今回はショーイングが映像での発表ということだったので映像作品として形に残せるような振り付けにしようとパートナーと話し合いクリエーションを行いました。私達は和室からインスピレーションを受けその小さな空間の中で「和室に元々存在しているのが当たり前のような違和感のない立ち姿」をテーマに構成しました。最初はデュオの作品だったのですがどうしても人

間らしさ、生々しさが強く出てしまい和室から私達の存在が浮いていたので、インパクトのある大きな違和感を取り入れることにし黒い服の男性に入っていただくことにしました。彼には立っている所から布団の上に寝転ぶというとてもシンプルな動きをお願いしたのですがそれがとても効果的になったと思っています。映像だとレンズの関係や光で見え方の印象が変わる事に気づき、立ち位置やカメラのアングルで調整をして私達の見せたいものに近づけられたと思います。（林）

・建築とコンタクトということでしたが、僕自身コンタクトの経験があまりない状態でスタートしました。いきなり物、建築とコンタクトするのではなく、生身の身体同士を重ねていくことから始まり、物に移行していくという作り方が今までにない発見でした。生きている身体と静止している物体とのコンタクトでは自分自身の身体に伝ってくる感覚も違い、その両方を創作する時に使い分けられると面白いと思いました。（森本）

Q.書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・もともとコンタクトには興味があったんですが、今回でより好きになりました。次回の WS にも参加したいです。「作品を創る」っていうことに関して、深くもっと知りたいです。（成田）

・日々ワクワクがある WS で、参加して良かったです。（平尾）

・今後作品を作る時に建築物からのアプローチが作品にとって有効的に働く可能性がある事を知り活かしていきたいと思いました。（林）

［講師プロフィール］

坂本公成＋森裕子（Monochrome Circus）
京都を拠点に国際的に活躍するダンスカンパニーMonochrome Circus を主宰する。日本を代表するコンタクト・インプロヴィゼーション指導者でもある。’98 年より「水曜コンタクト」なる WS を定期的に開催、20 周年を越えた。ダンサーはもちろん、大人と子ども、教育や福祉の現場などで CI をベースに多岐にわたる分野とクロスオーヴァーしながら活動を展開。「京都国際ダンスワークショップフェスティバル」のファウンダーでもある。2018 年より micelle（札幌）との CI による地域間交流を開始、『endless』、『レミング』などを上演した Sapporo Dance Boat Project 2019 は札幌市民芸術祭「奨励賞」を受賞した。http://monochromecircus.com

三野貞佳（アリアナ建築設計事務所）
建築士。プロダクトデザイナー。2児の父。アリアナ建築設計事務所代表。修成建設専門学校 非常勤講師。京都で生まれ育ち、家具屋の父、宮大工の曽祖父の影響もあってか建築の世界に足を踏み入れる。歴史の深い京都の地で建築を学び、アトリエの建築設計事務所で住宅から大規模建築、プロダクト開発まで 10 年間実績を積んだのち、アリアナ建築設計事務所を開設。暮らしに関わる全てデザインを業務範囲とし、大阪を拠点に活動中。https://www.aliana-arc.com

photo by Yuko Hishikawa

⑦【福岡クリエイティブパートナー】

「わたしと身体のゆるやかな ダンス革命 イン福岡」

企画・運営：山崎広太／フルイドハグハグ、スウェイン佳子／NPO 法人コデックス

［プログラムの特色］

●わたし自身の身体を考えると、身体は多くのことと関係していることに気付きます。人間の生態までも考えてしまいます。

●それぞれのアイデアを身体を通して何度もシェアすると、身体は時間と空間さえ飛び越えることもできます。

●ダンスを一度忘れて、新しい身体を追求する旅です。どんなメディウムを使用しても可能。誰もが参加可能。

［運営団体プロフィール］
●山崎広太／フルイドハグハグ：社会におけるアーティストのためのオーガニゼーションとして 2008 年に設立。プログラム・ディレクター：山崎広太。
●NPO 法人コデックス：福岡を拠点に社会とアート、特にパフォーミングアーツとの新たな関係を創造し、誰でもが創造することの楽しさ、素晴らしさを享受し、生きる力を得ることの出来る、自由で豊かな地域社会の実現に貢献することを目的として活動する特定非営利活動法人です。2008 年から毎年「フリンジ（辺境）から世界へ」の理念のもとに福岡ダンスフリンジフェスティバルを開催。

（※緊急事態宣言により、当初予定していた福岡市の会場でのワークショップを、オンラインでのワークショップに切り替え、実施した。）
ダンスの持つ可能性を探り、日常とダンスとパブリックスペースを有機的にかつ新しい視点で結びつけ、ダンスに向けて新しいエネルギーを育成対象者とともに生み出すというのがこのワークショップの概要である。具体的には、参加者は、ワークショップ開始前から、準備された特設サイトで講師の山崎広太からのメッセージや『綴る言葉』を読むことができ、どのように作品を創っていくかを考える時間が与えられた。そして、1 月 30 日から 2 月 7 日のワークショップ期間中には、毎回 2 時間の ZOOM レクチャーで説明や紹介された多様な動き、振付の方法などをそれぞれの居る空間で実験したり見せ合ったりした。また昼・夜、屋内・屋外の五感の働き方の違いなども ZOOM 中に実際に体験し各自が発表した。ZOOM レクチャー外の時間には、講師の指示や参加者間でのインストラクションからインスパイヤーされた言葉や詩、写真や動画などが創られ、活発にサイトに投稿され、そこからまた新たなクリエーションが生まれ広がっていった。2月7日のワークショップ最終日には、講師と参加者全員の話し合いで、まずは 3 月 9 日までこのクリエーション作業を継続し、できれば作品にまでしたいという結論がでた。作品は以下のオンライン特設サイトにて公開している。

https://kotaworkshop.jcdn.org/

実施概要

［対　象］性別、年齢、障害の有無、国籍不問。ダンスや演劇など身体を使った表現に興味のある方や、身体がベースのアートや美術に携わっている方、地域を活性化するためのパブリックアクションを起こす意志や興味のある方など、ダンス経験はもとより、ダンス経験がなくても、何かを創り上げようとする強いエナジーの持ち主であれば、誰もが参加可能。
［日　時］ミーティング　2 月 6 日(土)、10 日(水)、24 日(水)、3 月 10 日(水)19:00～
ワークショップ 1 月 30 日(金) – 2 月 7 日(土)
※ワークショップ終了後は、オンラインワークショップ用のサイトに映像を投稿するため、もしくは自身の作品を作るためのクリエーションを行う。月に 2 回程、全員のミーティングを行う。参加者には、そのミーティング前に投稿をしてもらった。
［会　場］スタジオ 505、オンライン開催
［講　師］山崎広太
［参加費］受講料：全日程通し　10,000 円
［スタッフ］企画運営：山崎広太　制作運営：スウェイン佳子　スタッフ：二宮聡、大野智子、真崎千佳、コートニー・スウェイン

事業の成果など

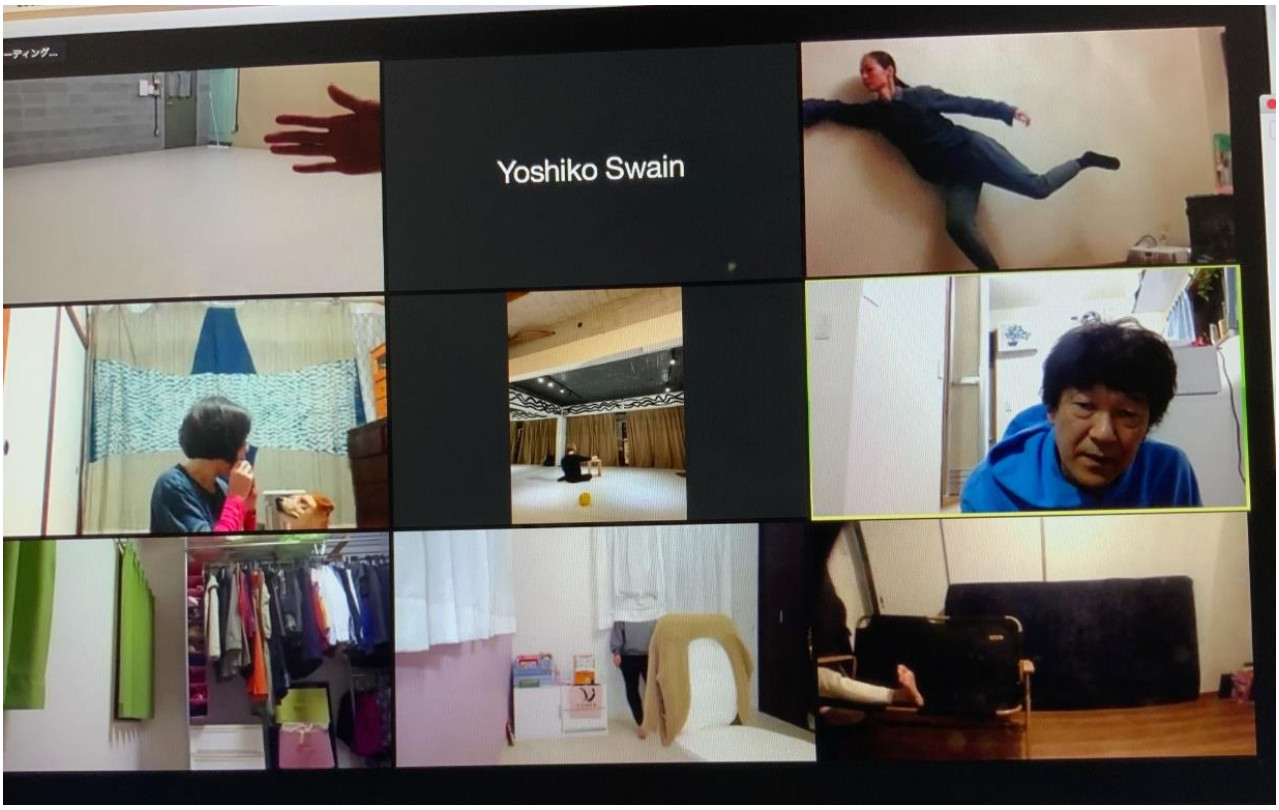
［事業の成果］
新型コロナ感染拡大の非常事態宣言発令下でのオンライン・ワークショップは、参加者の非常に積極的な姿勢により、毎回、集中的に進行して行った。また、特設サイトにも連日投稿があった。まさに、いつでもどこで も、いかなる場所でも、いかなる関係性においてでもパフォーマンスは成立することを関係者全員が実感できた。日常とダンスとパブリックスペースを、有機的にかつ新しい視点で結びつけるというこのプロジェクトの目的は、アートとしてのダンスと、私たちがこの社会で生きるということの関係性や意義を、この非常事態宣言下であるがゆえ、一層、考えるいい機会となり、今後のダンスに向けて新しいエネルギーと勇気を参加者に生み出した。そして、どんな些細なことからでも立ち上がるダンスのアイディアを皆で話し合い、共有、するという貴重な経験ができた。

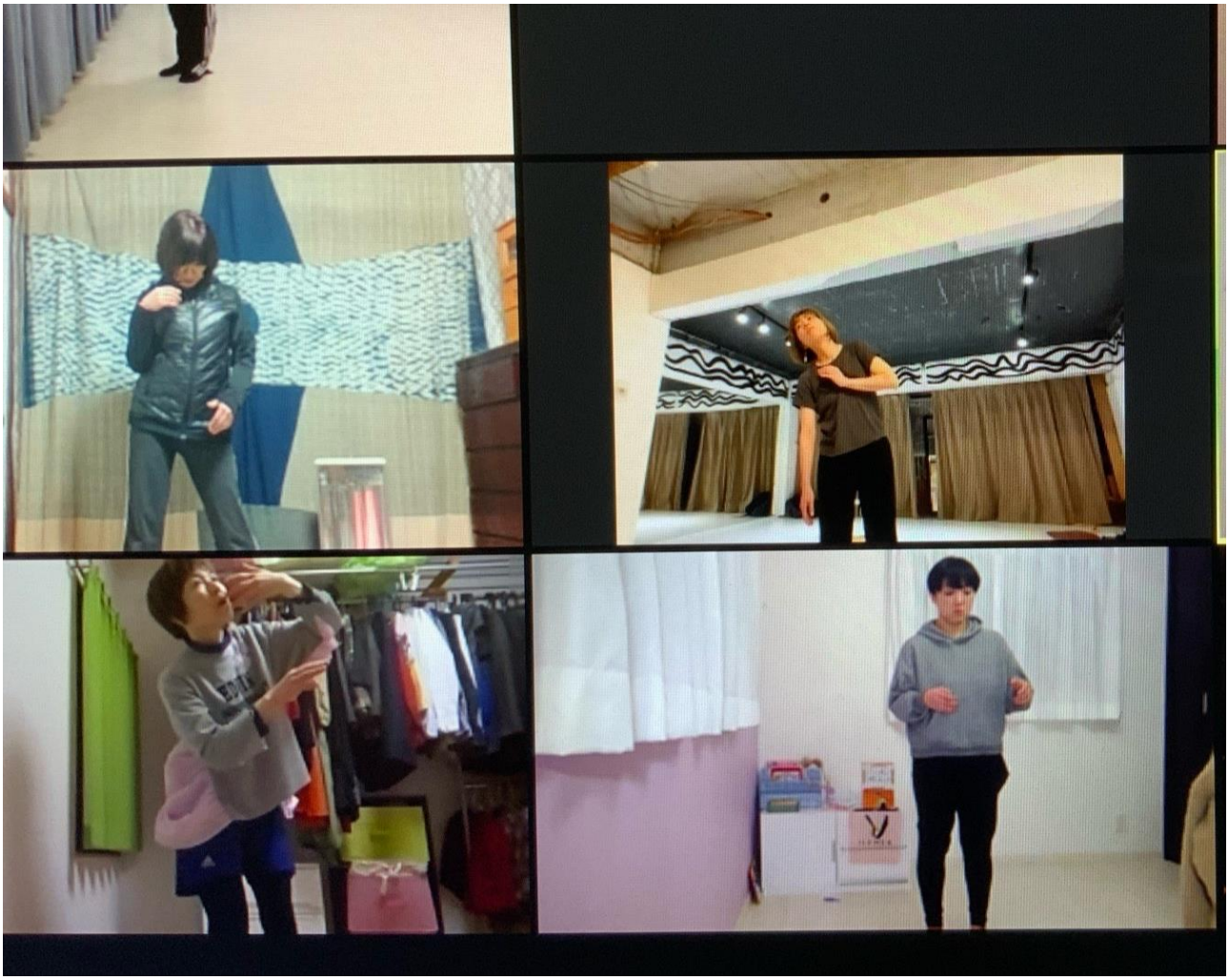
［事業における工夫 ］
非常事態宣言が発令され、ワークショップを予定していた会場が使用できなくなった。中止もやむ得ずとなったが、講師はじめ参加者の熱意で、急遽、ZOOM でのオンライン・ワークショップに変更し、投稿や交流ができる特設サイトを設けた。具体的には ZOOM によるウエブ・レクチャーで多様な動きや組み合わせなどを学び、何回かは屋外に佇んでの観察や感覚の違いを体験し、全員で話し合った。ZOOM の時間外では、参観者全員が多くの時間をかけて、特設サイトでの言葉（詩や参加者間のインストラクションなど）からインスパイヤした作品の創作を試み、それがまた全員の話し合いから新たな作品へと展開していった。

［事業の課題］
＜人材育成における今後の課題＞
参加者の創作の成果と発表の時間が取れなかった。
＜その他の課題＞
オンラインでのワークショップに変更したため、数名の応募者が辞退された。新型コロナの終息まで、どのようにしてダンスなどのパフォーミングアーツの活動を継続して行くかは大きな課題である。

［育成対象者に対するスタッフ・共演者・協力機関・関係団体等の声］
・参加者はそれぞれダンス経験や演劇経験をかなり積んでいた。そして、そこからもう一歩自分のパフォーマンスを深めたい、展開していきたいというのが共通の参加動機であったので、今回のワークショップから多くの情報や示唆をえることができたと考える。
・複数の関係者から、素晴らしく活発なワークショップだったと評価された。新型コロナ感染拡大のため、ワークショップを実施できるか難しい判断を求められたが、関係者各位と参加者の勇気で実施できたことに感謝したい。

［実施後の効果］
ワークショップ終了後も、参加者全員が自発的に講師と話し合って、このプロジェクトを継続している。今回、このプロジェクトにスタッフとして参加したミュージシャンは、今回の参加者の相談にのり無料で音を提供すると発表した。NPO 法人コデックスも社会的な広がりの中で、いい創作が見れる機会をなるべく多くつくり、このプロジェクトをフォローアップしていきたい。


Yoshiko Swain



［参加者］ 計 8 名

岩下愛 （40 代／女／福岡県）

ダンサー。HIPHOP・バレエ・コンテンポラリーを学ぶ。

宮原一枝 （50 代／女／福岡県）

高校非常勤講師。大学からダンスを始める。即興ダンスを岩下徹氏に師事。

福田沙織 （30 代／女／福岡県）

ダンサー。幼少よりバレエを学ぶ。オーストリアに留学。チェコ国立モラヴィアン・シレジアン劇場に 4 年間所属。

浅沼圭 （40 代／女／東京都）

アスリート、ダンサー。元日本代表新体操選手。

小山柚香 （30 代／女／東京都）

ダンサー・振付家。2012 年～パフォーマンスシアターグループ Comp.を主催。

岩永美樹 （50 代／女／福岡県）

ダンサー。2004 年コンテンポラリーダンスカンパニーhoramiri 設立、代表）

まさきち （40 代／女／福岡県）

ダンサー・振付家。2005 年よりコンテンポラリーダンス創作開始。「福岡ダンスフリンジフェスティバル」には5回出演。

内田正信 （60 代／男／福岡県）

舞台照明家。「福岡ダンスフリンジフェスティバル」のテクニカルディレクター。森下真樹作品や大橋可也作品等に出演する。

参加者の声：

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・振付とは、作品とは、と言うことを考え直したくて参加をしましたが、作る事より、作品を観ることがより興味深くなりました。言葉では伝わらないことをどう出しているのか、ダンスだけでなく、さまざまな作品の見方が変化したように感じます。また、自分ではわからないもやもやした所を他の参加者の皆様が質問やお話されていたのを聞き、1 人ではなし得ない時間を過ごすことができました。（岩下）

・日本では、経歴やルーツに基づいたダンススタイルが評価される傾向があるように思いますが、どんな所からでもダンスを立ち上らせる事ができる希望を、今回のワークショップにおいて感じました。また、そういったプライベートだったりマイノリティな事柄を、いかにパブリックなものに変換していくかという思考展開のヒントを得る事ができました。（小山）

・作品作りはどのようにして作るのか全くわからなかったが、山崎さんのダンスとの向き合い方、人間性、ワークを通してヒントやキーワードを掴ませてもらいました。オンラインでしたが、お話ししたり、動画も見れたり、一人一人がしっかり見える状態はとても親近感が湧き、普段のワークショップとはまた違う一面を感じられました。このような機会をどうもありがとうございました。（浅沼）

・私は普段ダンサーとして活動しています。プログラムの目指す趣旨とは異なるかとは思いますが、今回の WS には、作品とは、ダンサーとは、といったことを、創り手側の視点に立って考えてみたいと思い、参加させていただきました。自分が受け取った中で最も大きかったのは、振付家が作品の絶対的なスタートであり、実際に作り始める前までの準備がいかに重要であるか、ということでした。「インストラクションの文章を考え、他の人にそれをやってもらう」というワークの中で、インストラクションをやる人がどんな形でアウトプットしようと、その発生は文章からでしかなく、それは文章を考えた人の作品であり、その文章を書いた時点で作品の根っこの部分が決まる、と感じました。作品における振付家の強さを再認識するとともに、実際に作り始める前の段階が重要である（知識や経験・考えがないと、作品として強度がない）ということを実感しました。（匿名）

・山崎さんがダンスをどう考えられているかに触れることができました。オンラインということで、接する時間がリアル開催よりも長く取れたように感じられ、より得るものも大きかったと思います。たくさんのキーワードやヒントを頂きました。これまで自分が考えていたダンスを違う方向から考えるきっかけになりました。（つかの）

・山崎広太さんのダンス観を知るとても貴重な機会だった。「ダンスとは何か？」という問いに対し、答えがないことを追い求め

ていくこと、ではないかと思った。問い続けること、諦めずに、が大切であると思う。
ワークショップの中では、特に「ことばとムーブメント」のワークを沢山行い、とても興味深かった。「ムーブメント」は、体の反射や反応で出てくる時もあるが、「ことば」は頭を使いなかなかうまくいかず、これは相当の練習が必要だと感じた。またダンスが劇場のみならず建築や環境にまで及ぶこと、舞台美術についての考え方など広義にダンスを学び、ダンスの可能性が広がった。ダンスを作ることは、私にとってすごく身構えて、張り切って、どうしようもない衝動が起きた時のものだと思っていた。しかし今回受講して、肩肘はらず日常からダンスを見つける視点や考え方を多角的に学ぶ事ができた。いつの日か私のダンスを見つけたい。（真崎）

今回のワークショップで、ダンスはその特性を活かして、人とつながり、空間や視点を変え、社会的な活動を取り込んで、劇場を超えた新たな場所で設定（セノグラフィー）ができるということを教えてくだいました。サイトスペシフィックダンス、コミュニティダンスを含みながら、さらに参加型の活動につながると思いました。身体を通してできることを改めて考えるいい機会になりました。また、山崎広太さんの変わらないお人柄と、振付に対しては感覚的にち密にいろんな方法でアプローチされていて、大変刺激になりました。（宮原）

最初に言葉とダンスをから、インスパイヤーすることでどういう作品を作れるかのテーマで始まりました。参加者同士で映像にあげたりして、お互いの作品を感じたことを、討論したりして、ホームページに投稿という中身の濃いワークショップでした。短い期間にみなさんそれぞれ作品を動画だったり、文章だったりたくさんあげてありました。画面上のコミュニケーションでしたが、それぞれの作品に向かう振り付けの違いも現れていました。ダンスの起こるきっかけを見つけても良いし、それを無視しても良いみたいな。結局、ダンスは己自身の考え、身体から生まれてくるしかないのかと思いました。ZOOM の中でのワークショップでしたが、リアルなワークショップとはまた違った面白いワークショップになりましたが。大変楽しくあっという間の気づきの時間を持てました。（内田）

Q.書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

NY のアートシーンについて具体的な例を挙げての解説がとても分かりやすく新鮮でした。もしオフラインでの開催が可能だったら、より深く理解が得られたのではと感じますが、オンラインならではのこの繋がりを続けていく事で、より理解を深め創作に繋げていきたいと思います。そういった場を得る事ができた事がとても貴重な収穫でした。（小山）

・今回は、対面からオンラインのワークショップに変更になり、最初はとってもガッカリしました。その後、講師とワークショップ受講者のサイトが立ち上がり、ワークショップ時間内はもちろん、サイト内でもダンスの言葉や動画をシェアする事ができ、想像以上に面白いワークショップ体験となりました。JCDN の皆さん、広太さん、スウェインさん、コニーちゃん、参加者の皆さん、本当に感謝でいっぱいです。ありがとうございました！いつの日か対面でお会いしたいですね。（まさきち）

・コロナ禍で大変な時期に、ワークショップの企画をしていただき、どうもありがとうございました。パソコン等の苦手意識が高く、オンラインでの参加は少々不安もありましたが、自室や自宅前の通りなどでこんなにたくさんのことができてびっくりしました。おかげさまで自分で動画を撮ったり編集したり、決して今まで踏み入れなかったことにチャレンジできました。また機会がありましたら参加したいと思います。どうもありがとうございました。（宮原）

［講師プロフィール］

山崎広太
サラローレンス大学、カルフォニア大学、ベニントン大学ゲスト講師。2007 年、ニューヨーク・パフォーマンス・アワード（ベッシー賞）受賞。2013 年、現代芸術財団アワード受賞。2017 年、ニューヨーク芸術財団フェロー受賞。2018 年グッゲンハイム・フェロー受賞。2012 年、2015 年ナショナル・ダンスプロジェクトから助成。現在、同時に、都市ー劇場横断パフォーマンス・プロジェクト、Becoming an Invisible City を進行中。2019-20 年、ニュージーランドの Footnote ダンスカンパニーからの委託で新作を振付。ボディ・アーツ・ラボラトリー主宰。 http://bodyartslabo.com

⑧【創造環境パートナー/ダンスヒストリー】

［運営団体プロフィール］
講師プロフィールを参照

ダンサー・振付家・制作者に「役に立つ」バレエ・ダンス史」

企画・運営：ダンスヒストリー・スタディーズ（代表：芳賀直子）

［プログラムの特色］

●今の自分のダンスがどのようなダンスの歴史の中に存在しているのかを知る。それは同時に振付の歴史を知ること。

●歴史の中で俯瞰して自分のダンスを見ることで、いま自分が何を創り出そうとしているのかを考える。

バレエ、ダンスを実際に踊られている方が歴史に触れる機会は極めて限られている現状。そうした中でバレエ、ダンスの歴史を知ることはクリエイション、教育、自身の活動の何らかの助けになるはずである。その種まき作業を始めたいと思う。今年は昨年の声を反映して、より実践的な「役に立つ」ヒストリー・スタディーズを目指す。他の会場の企画と連動し、オーダーメイド的講座の開催をする。また、質疑応答の時間を十分にとり、それぞれの疑問にたっぷり答えられる講座とする。
振付の歴史を知り、今の自分のダンスがどのようなダンスの歴史の中に存在しているのか、歴史の中で俯瞰して自分のダンスを見ることで、いま自分が何を創り出そうとしているのかを考えるための講座として開催。

■ダンサー・振付家・制作者に「役に立つ」バレエ・ダンス史　広島編
ダンスでいこう広島プラットフォームと連携し、広島の「ダンスアートプロジェクト」参加者と、オンラインで募った参加者を対象にダンスの通史をお話した。

■ダンサー・振付家・制作者に「役に立つ」バレエ・ダンス史　zoom 編
事前にアンケートを実施し、疑問点、知りたい点、またダンス・バレエ史のイメージを尋ね疑問を補完する形で講座を実施。

実施概要

［対　象］作品制作経験のあるダンサー、振付家
広島編：広島の「ダンスアートプロジェクト」参加者、ダンス、バレエを 5 年以上踊ったことがある方など
zoom 編：舞台経験 5 年以上のダンサー（ジャンルは問いません）、振付家
［会　場］広島安芸区民文化センター＆オンライン
［日　時］・広島編：2 月 11 日（木祝）14:00～15:30　・zoom 編：3 月 6 日（土）13:30～16:00
［参加費］広島編：1000 円　zoom 編：3000 円
［講　師］芳賀直子
［スタッフ］広島編:竹内ひとみ
［共　催］広島編：Free Hearts、安芸区民文化センター

事業の成果など

［事業の成果］
zoom 編は、かなり内容的にはボリュームがあるものになったが、参加者の理解は得られた、という手ごたえを感じた。参加者の人数についても内容を参加者に合わせるという今回の形ではマキシマムと感じた。
通常日本のダンサー、振付家が極めてすくない自分たちがしている「ダンス」「バレエ」の歴史を身近なものとしてとらえ、その意義を理解してもうらうという目的は達成できた。

［事業における工夫］
広島でもオンラインでも事前にアンケートを行い、一番関心がある部分、疑問のある部分をお尋ねし、それにそって丁寧に講座を組み立て伝えた。
Zoom 編では、特に人数は集まらなかったが完全にその人の疑問、希望にそう形で講座を組み上げ、対話を行った。

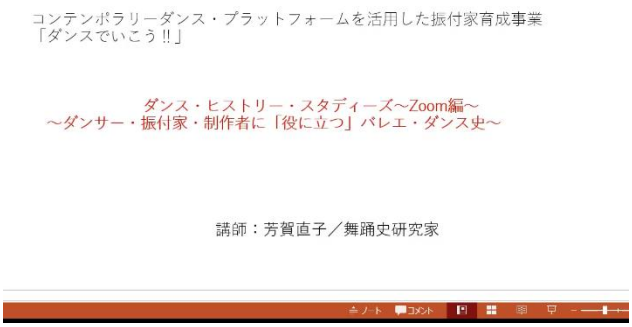
［事業の課題］
＜人材育成における今後の課題＞
広島は Free Hearts さんのご協力とワークショップとの連携で参加してほしいと思う客層の集客に成功したが、オンラインは Web ページ公開にミスがあり、実質的にだれもがそのサイトにアクセスできるようになったのが 26 日と遅く、集客ができず惜しい事になってしまった。
＜その他の課題＞
元々ダンサー、振付家が歴史に関心を持つことが少ない状況下で、ます関心を持ってもらうために、例えば clubhouse からの動員など集客、告知については努力が必要。

［実施後の効果］
参加者には HP からの質問を随時お受けする旨お伝えした。実際にどう歴史が自分の創作活動、ダンサーとしての活動に「活用」できるのか実践の中でより広げてもらいたい。

［講師プロフィール］

芳賀直子
舞踊史研究家。専門はバレエ・リュス、バレエ・スエドワ（ともにバレエ団でありながら「コンテンポラリーダンス」作品を積極的に公演したカンパニー）。舞踊、中でもバレエ研究家として執筆、講演、展覧会監修等を行う。各種媒体への執筆活動と共に、そのエレガントな語り口による講演の人気も高い。関西学院大学講師、大正大学客員准教授としてバレエからはじまり、現在ではコンテンポラリーダンスと並列的になっている現状について伝え続けている。著書多数、近著は『バレエ・ヒストリー～バレエの誕生からバレエ・リュスまで』（世界文化社）　現職：新国立劇場バレエ研修所　バレエ講師、関西学院大学文学部　非常勤講師、K Ballet School TTC コース　バレエ史講師、新国立劇場バレエ研修所講師、各種賞審査委員、JIDF 幹事、Japan Dance Forum 会員。

photo by SAI



［参加者］ 計 21 名
末久誉子(50 代/女/広島県東広島市)、北川すみれ(10 代/女/山口県岩国市)、玉野日向子(20 代/女/東京都国分寺市)、中本妃世里(10 代/女/広島県三原市)、西梶真理子(女/広島県)、善岡宏和(30 代/男/広島県広島市)、他

参加者の声：

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・踊りの歴史に対して、あまり深く考えた事がなく、バレエの発祥についてはなんとなく調べた事はありましたが、ここまで詳しくは知りませんでした。長い歴史の中、世界の情勢と共に踊りもそれに適応しながら発展してきたのだな、という印象です。そういう意味では、今まさに、このコロナ禍でダンスをどう変化させるべきかは、将来のダンスヒストリーに大きな影響を与えるのだと思いました。この環境に適したダンス作品創りを試行錯誤しながら日々勉強していきたいな、と感じています。(末久)

・私は今までダンスの歴史をあまり知らなかったです。これから振り付けをする機会がある時にバレエ、ダンスの歴史を知っていればそれから発見やヒントに繋がることもあると思いました。今日のお話を聞いて自分の知らない世界を知れて新たな発見ができて嬉しかったです。もう一度よく整理しまた調べたりしてこれからのダンス人生に活かしていきたいです。本当にありがとうございました。(北川)

・私は大学で表現について学び、座学の授業で軽くダンスの歴史については学んでいました。また、自主的にダンスに興味のある仲間と集まってダンスの歴史について勉強していたところなので、その二つで学んだことを再び復習すると同時に新しいコアな部分まで知ることができ、大変充実していました。振り付けをする上でついつい新しいことを求めてしまいますが、過去にも目を向けることでそこからヒントを得ることができるという言葉が印象に残っています。(玉野)

・コンテンポラリーバレエ、コンテンポラリーダンス、モダンバレエ、モダンダンスについて発見することがありました。これから、将来どうするかっていう決断をすることがあるんですが、今回初めてバレエ史の話とか聞いて、まだ全然知らないことの方が多いので、もっと色んなことを調べて関わっていき、それから自分が何をしたいかしっかり考えたいなと思いました！(中本)

・殆ど勉強していますから、再確認させて頂きました。バレエを、知らない若者には、時代背景を、知って頂き、良かったです。(西梶)

・ダンスの形やダンスに関わる物にはそれぞれの歴史があり長い時間をかけて試行錯誤された結果、今あるダンススタイルや物の形状として成り立ったと言うことがとても興味深かったです。(善岡)

Q.書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・私の中でも、ダンスに対してのジャッジには少し疑問を感じています。スポーツというジャンルで競争しながら発展していくのだろうか、それは芸術なんだろうか、を、これから見極めていきたいと思います。(末久)

⑨【創造環境パートナー/ダンスメディア】

「ダンスを撮る！」
-第４回ダンス映像撮影ワークショップ-

企画・運営：Dance New Air／
一般社団法人ダンス・ニッポン・アソシエイツ
（代表：宮久保真紀）

［プログラムの特色］

●撮影することで自身の定義が覆るかも？

●何をもって「ダンス」というか。「撮影すること」から「撮影されること」を知る。

●ダンスフィルム映画祭のエントリーも視野にいれてみよう！

［運営団体プロフィール］
2002 年から開催してきた「ダンスビエンナーレトーキョー」が築いた地盤を引き継ぎ、中心メンバーにより 2015 年 5 月に一般社団法人を設立。東京・青山を舞台に、アジアにおけるコンテンポラリーダンスの拠点として定着してきた、国内最大規模のコンテンポラリーダンスの祭典を 2 年に一度開催することを主目的として活動を開始。世界のコンテンポラリーダンスの裾野を広げ、国内外のダンスを取り巻く環境を豊かにすることを目指している。

近年、映像を撮影することが日常的になった。しかし日本では「ダンスフィルム」はいまだ一つのカテゴリーになっていない。ダンスを表現することの大きな転換期である今だからこそ、劇場で公演することとは違う観点でダンスを表現し発信することで、ダンサー、振付家の新たな活動となるベースを育成する。今回は参加対象者をダンサー・振付家に絞り、「　　」と戯れるをキーワードにダンス映像を撮影することを通して「ダンスとは？」をより深く考察する機会をつくった。

実施概要

［対　象］ダンサー、振付家（経験年数は問わず）。全 5 回参加できる方。

［日　時］〈1 日目〉10 月 1 日（木）19:00～21:00　〈2 日目〉8 日（木） 19:00～21:00　〈3 日目〉11 日（日）13:30～15:30
〈4 日目〉15 日（木）19:00～21:00　〈5 日目〉18 日（日）13:30～15:30

［会　場］オンライン

［講　師］吉開菜央

［参加費］受講料：15,000 円（税込）　［スタッフ］企画制作：宮久保真紀

［講座内容］

〈1 日目〉「　　」と戯れる／軽く身体をほぐした後に、様々な物体や光、空間、気配と戯れることを試してみる。

〈2 日目〉 音、リズムを考える／1 日目の課題で作成した映像を鑑賞し、「ものの質感」「気配」についてディスカッションを行う。その後、映像における音やリズムについて考察し、制作に反映させることを学ぶ。

〈3 日目〉 音、リズムと戯れる／2 日目で行った音とリズムの考察をさらに深め、効果音のようなものをつくったり、音の編集、音楽のようなものを作ることに挑戦する。

〈4 日目〉 作品編集に挑む／これまで撮影した映像や録音した音を組み合わせてダンス映像作品を編集する。自分が踊りだと感じる感覚が映像を透して伝わるような作品を目指す。またそれぞれの考えるバリアフリー的な要素も加えてみる。

〈5 日目〉 上映・講評／課題の作品上映と講評会。自分の作品を発表することで得られる意見を参考に、今後のダンス映像製作に活かす。

［準備するもの］スマートフォン、スマートフォン用三脚、映像編集ソフト（推奨：Adobe premiere。ただし iMovie などの無料編集ソフトの使用も可）お香、お香立て、懐中電灯、動けるスペース二畳程度

事業の成果など

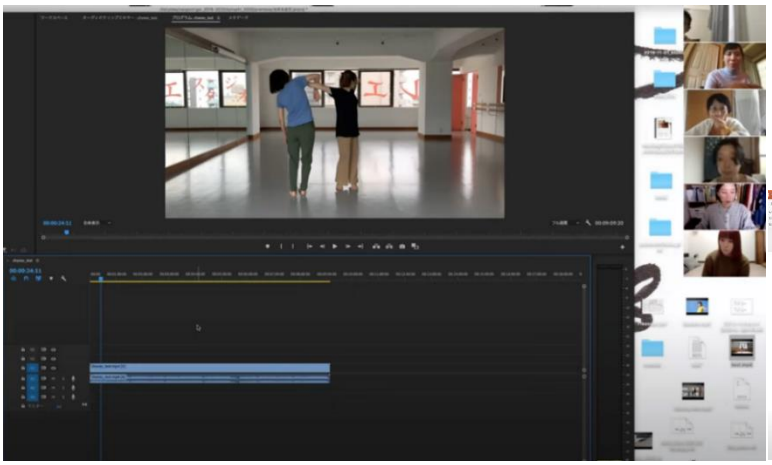
［事業の成果］
・当初の計画から対面ではなくオンライン上での開講とし、10 名募集のところ、5 名の参加と少なかったが（応募数は 6 名。1 名が仕事の都合でキャンセル）、一人一人に対しての時間を多く取ることができた。また、4 回から 5 回へと講義数を増やしたことも、充実した内容と繋がった。
・5 名のうち、4 名が首都圏、1 名が愛知県からの参加。生活地域が異なる場所からの参加はオンラインならではといえる。5 名とも全講義出席できたのも、講義場所までの移動がなかったことが大きく影響したと考える。

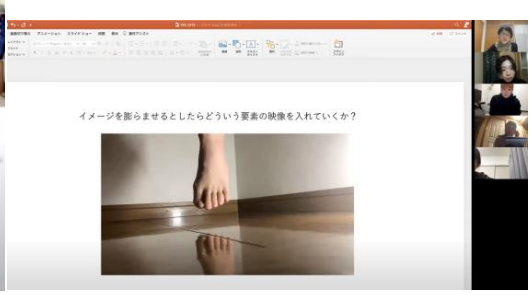
［事業における工夫］
・講師の吉開菜央氏が 2020 年春～夏にかけて、実際に大学で行ったオンライン講義をベースにプログラム内容を決めた為、5 回の講義を計画的に遂行できた。
・カメラで撮影することだけでなく、身の回りの物で音を作り出したり、物の質感から身体の動きを導き出したりすることを課題にし、身体表現の創作活動の一つとして映像を学べる内容となった。
・Google Drive を有効に活用し、事前課題を共有したり、それぞれで撮影した素材を、気に入ったものがあれば使用できるシステムにしたことで、表現の幅を広げることができた。

［事業の課題］
＜人材育成における今後の課題＞
短期集中型の開講だと、課題の創作にかける時間が少なくなってしまう為、次回はもう少し長期に設定し、創作時間をしっかりとれるような設定を目指す。
＜その他の課題＞
映像創作に関心の高いアーティストは、2020 年のコロナ禍で多くなっているが、しっかり学ぶ為の時間や予算を持っている人は限られている。機材や編集ソフト等、本格的になればなるほど、実費もかかってくるので、次回公募の際は、使用機材関連もより具体的に示したい。

［育成対象者に対するスタッフ・共演者等の声］
・対面よりもオンライン開講は人数が少ないほうが、より深い講義ができる。
・画面共有を利用し、編集ソフトの使用方法を具体的に学べることがよかった。

［実施後の効果］
・講義で学んだことに通じる手法が使われている映画作品と、講師の映画特集が 2020 年 12 月にユーロスペース（東京・渋谷）で開催について紹介し、鑑賞を推奨した。
・次回は第 5 回を迎える為、新たな参加者を募ると共に、一度参加した方向けの割引金額設定し、継続して学べる環境を提供することを検討する。





［参加者］計 5 名

白井七海（愛知県／ダンス経験：5 才～新体操、コンテンポラリーダンス経験 1 年弱）

上村有紀（東京都／ダンサー・振付家／Von・no ズ主宰）

高宮梢（東京都／ダンサー・振付家。2016 年より関かおり PUNCTUMUN に参加）

関かおり（東京都／ダンサー・振付家。関かおり PUNCTUMUN 主宰）

张燕（埼玉県／ダンス歴 4 年）

参加者の声：

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・カメラを通して身体をとることで、伝えたい質感がより明確にできることを知りました。なので、踊るのが楽しくなりました。こういう世の中で、これからどうやってやっていくのがいいのかな、と考えていて、私自身、まだダンスや振り付けの経験が浅く、いきなり創作したものを舞台で発表するのにも抵抗があったので、撮影という新しい世界を知れてよかったです。編集をするのも初めてだったのですが、やり始めるとめちゃくちゃ楽しくて、ハマりました。自分の新しい興味を見つけられて嬉しいです。（白井）

・今回の WS の期間中を振り返ると、様々な視点をもって生活をしていたなと思います。第一回目の課題の気配を撮る、日常生活で気配を探しながら生活することが面白く約 1 週間いつもとは違う角度から物事を捉えて生活しておりました。第三回目の課題、sound もまた音楽の概念が取り払われて、音そのものに注視して普段の生活を送っておりました。それらの視点を一つ変えるということ、多角的に捉えること、今後なにかを作る際に生かせると思いました。今回の WS を通して、映像編集のハードルが一個下がったと言うこともまた一つ感想にあります。映像作家とのコラボレーションや、舞台映像を研究している友人の作品に参加させていただいた経験があり、いろいろな角度から見ることや撮ることに関しては以前から少しづつ行っていたことだったのですが、それを自分自身で編集する作業は今までやったことがありませんでした。なんとなくできないだろうと思っていたことが WS を通して意外とするっとでき、挑戦できてよかったなと感じております。（髙宮）

・映像作家としての吉開さんの視点を覗けたことと、オススメの作家を紹介いただけたことが刺激になりました。また、機材やアプリなどについても詳細に聞けたことがよかったです。門外漢すぎて誰に聞いたら良いかさえもわからないことばかりでしたので、丁寧に教えてくださってありがとうございました。google drive の利用で他の方の作品の課題を見られること、最終課題で他の方が自分の素材を利用して作って下さったのを拝見できたのも刺激的でした。自分の子が知らない子になっているような、記憶の中でよく知っている風景を覗いているような、不思議な気持ちになれました。（関）

［講師プロフィール］

吉開菜央

映画作家・振付家・ダンサー。1987 年山口県生まれ。日本女子体育大学舞踊学専攻卒業、東京藝術大学大学院映像研究科修了。作品は、国内外の映画祭での上映をはじめ、展覧会でもインスタレーション展示されている。MV の監督や、振付、出演も行う。映画『ほったまるびより』監督。米津玄師 MV「Lemon」出演・振付。2018 年に制作した《Grand Bouquet》はカンヌ国際映画祭監督週間 2019 正式招待された。東京造形大学非常勤講師。受賞歴に「風にのるはなし」Motif Best experimental film（アラスカ、2018）、「ほったまるびより」文化庁メディア芸術祭エンターテイメント部門新人賞受賞（2015）、「みづくろい」YCAM 架空の映画音楽の為の映像コンペティション最優秀賞受賞（坂本龍一氏推薦、2013）、「自転車乗りの少女」那須国際短編映画祭観光部門出品じゃらん賞受賞（2013）。https://naoyoshigai.com

Photo by Natsuki Kuroda

【公演プラットフォーム】

KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD 2020

―若手振付家によるダンス公演＆作品を巡るディスカッション―

運営：京都コレオグラフィーアワード実行委員会
事務局：NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）、一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメント

●若手振付家のためのアワードを創設！
●地域格差をなくすため、交通費・宿泊費をサポート。
●振付家が次のステップに向かうための上演の機会とする。

「ダンスでいこう！！」の新たなプログラムとして、若手振付家のためのアワード『KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD』を 2020 年度に創設しました。このアワードは、振付家育成のひとつの方法として、若手振付家に作品発表の機会と賞を設け、観客と共に作品を巡るディスカッションを行うことにより、振付家を目指すアーティストの次なる活動へのステップとなることを目的に開催します。
各地のダンスフェスティバルのプロデューサーやダンス関係者、他分野の専門家を招き、いくつかの賞を設け、上演時点の作品の完成度・魅力だけではなく、未来に対する期待を含めた後押しとなる賞を目指します。

実施概要

［対　象］（応募時点で）

■40 歳以下のコンテンポラリーダンスの振付家。
■ダンス作品をこれまでに 2 作品以上発表している事。
■振付家としての成長・発展、自身の作品の発展・進化を望んでいる日本国内在住者。
■30 分前後のデュオ以上の人数の作品を発表したい方。

［選考プロセス］
全国公募。資料と映像にて応募していただき、今年度 55 組の応募の中から、書類選考にて 6 組を選出し、京都芸術センターで 2 日間に分けて上演。各日 3 組の上演後に、観客と共に作品を巡るディスカッションを行い、2 日目終了後に最終審査を経て、受賞者を決定。各賞の授与式を行った。

［日　時］3 月 11 日(木)17:00 開演　12 日(金)15:00 開演（開場は開演の 30 分前）
［会　場］　京都芸術センター 講堂
［料　金］入場チケット　前売 2,000 円／当日 2,500 円／オンライン視聴 1,000 円(各日)

［出演（振付家・団体名／活動拠点／作品名)］ ＊上演順
1日目　1、 長谷川寧／冨士山アネット(東京)「Virtual Society」
　　2、 小野彩加・中澤陽(東京)「バランス」
　　3、 松木萌(京都)「Tartarus」
2日目　4、 横山彰乃／lal banshees(東京)「海底に雪」
　　5、 中根千枝・内田結花(大阪)「移動する暮らし」
　　6、 下島礼紗／ケダゴロ(東京)「sky」

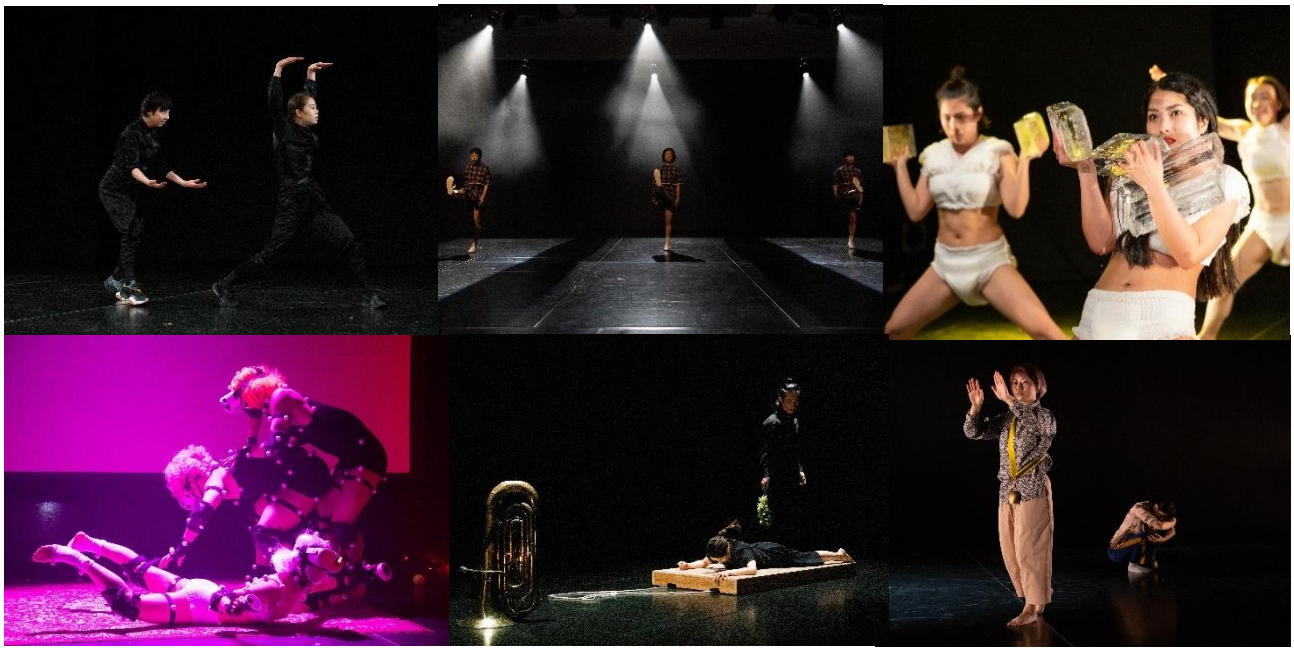
[リアルタイム配信＆観客投票について]
上演をリアルタイムで配信（有料）し、観客投票にて観客賞を決定するほか、公演入場料収入・オンライン視聴による全収益を、観客の投票数に応じて出演団体に分配した。投票は、京都芸術センターの観客の方にも 1 人 1 票の権利あり。
※観客投票は、各日ごとに行う。

[アワード審査委員] ※五十音順、敬称略 ※肩書は 2020 年度当時
石井達朗（舞踊評論家）
唐津絵理（愛知県芸術劇場シニアプロデューサー、DANCE BASE YOKOHAMA アーティスティックディレクター）
黒田育世（振付家・ダンサー、BATIK 主宰）
砂連尾理（振付家・ダンサー、立教大学 現代心理学部・映像身体学科 特任教授）
高嶺格（演出家・美術家、多摩美術大学教授）
萩原麗子（京都芸術センター プログラム ディレクター）
鷲田めるろ（十和田市現代美術館館長）
ゲスト：ダニエル・ユン（振付家・ダンサー、Hong Kong Dance Exchange アーティスティックディレクター）

※他、公募要項全文はサイト https://dance-it-is.com/program2020/kyoto2020/ をご覧ください。

[舞台スタッフ]
総合監督: 關 秀哉（株式会社流） 舞台監督: 尾崎 聡、浜村修司 照明: 伊藤雅一 音響: 高田文尋
映像オペレーター:川崎摩耶 映像配信: 嶋田好孝

[開催クレジット]
京都コレオグラフィーアワード実行委員会
事務局：NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）/ 佐東範一、神前沙織、松岡真弥
一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメント/ 坂本公成、森裕子、林 南々帆
共催：京都芸術センター Co-program カテゴリーD 採択企画/会場・機材提供、広報協力
協力：北海道コンテンポラリーダンス普及委員会／d-倉庫／ST スポット／ダンスハウス黄金 4442／NPO 法人 DANCE BOX／金沢 21 世紀美術館



KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD2020 photos by umiak

◆KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD 2020　結果

KCA 京都賞	下島礼紗/ケダゴロ
KCA 奨励賞	松木萌
KCA 奨励賞	横山彰乃/lal banshees
ベストダンサー賞	荒木知佳（小野・中澤振付作品出演）
オーディエンス賞	下島礼紗/ケダゴロ
香港賞	該当者なし

事業の成果など

[事業の成果]
今年度から、40 歳以下の若手振付家を対象に、創設した。全国に公募した結果 55 組の応募があった。その参加動機に、「コロナによって、すべての活動が止まってしまって目標を見失いそうになったが、このアワードのおかげで、コロナの中でも目標が見えました。」という内容が沢山あった。
上演当日も、コロナ対策をしたうえで、会場に観客を入れるのと並行して、オンラインでライブ配信を行った。会場での観客 2 日間で約 200 人に対して、オンラインでの申し込みは、240 名に上った。オンラインで行ったことにより、全国のダンスファンにライブで届けることが出来たのは、今後コロナが続いたとしても、ダンスへの熱を絶やさないために継続していける確信を得た。

[事業における工夫]
今回の KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD2020（以下 KCA）は、通常の賞をとるために競うコンペではなく、人材育成の一環としてのアワードになるように様々な工夫を行った。

〇通常の“コンペ”は、交通費など全てが自己負担であるが、KCA では、交通費・宿泊費をカバー、作品制作費一組につき 5 万円、観客賞の投票数によって、その入場料収入を各アーティストに渡すなど、幅広いサポートを行った。
〇賞の性格付けを行い、単に作品が素晴らしいということだけではなく、社会のおけるダンス作品の意味をベースにした賞の意味づけを行った。
〇オンラインによるライブ配信、その後 1 週間のアーカイブ配信を行うことにより、京都での上演を全国のダンス関係者が観られるようにした。このことによって、アーティストと作品を知ってもらうきっかけとなるように意図した。
〇審査会での、審査委員のコメントを、各振付家の確認了解の上、公開した。このことによって、どのようなポイントで観られていたかを明確にし、今後の活動において参考になるようにした。ほかの振付家や観客も、その講評を見られることによって、ダンス作品に対して様々な視点があることを気づけるようにと考えた。
https://dance-it-is.com/news/6639/

[事業の課題]
〇今回若手振付家 55 組の応募に対して、書類選考の結果 6 組を選出し上演を行ったが、その 6 組だけではなく、選出されなかった 49 組へのフォローを今後行っていきたいと考えている。
〇選出された 6 組、そして賞を得た 3 組に対して、賞を与えて終わりではなく、今後次のステップとして国内外での再演や上演の機会を、意欲的に作っていきたいと考えている。その為に、この「ダンスでいこう！！」の各プラットフォームと連携して、その場つくりを行っていく。

KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD2020　photo by umiak

上／　下島礼紗／ケダゴロ　「sky」

下／　松木萌　「Tartarus」

KCA 審査の経緯

※同内容をサイト　https://dance-it-is.com/news/6639/にて公開しております。

(a) 各賞に対する審査の方向性について

「KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD 2020(以下 KCA)は、人材育成のアワードであることを目的としています。その為、賞の性格付け、方向性に関して、これまでのアワードとは違う価値観を表せたらと検討をしてきました。
今回、1 回目の KCA として賞の選考に関して、事前に審査委員の方にお願いしたことは、“作品が素晴らしかった、作品の完成度が高い、技術が高かったという視点よりも、その作品が社会の中に存在する意味、振付家がなぜこの作品を創ろうとしたのか、それは意識したものであれ、無意識であれ、そしてその創ろうとしたものがどのように表れているか、というところに注目して、各賞の候補を選んでいただけたら”とお願いしました。ダンスでしか表現できないもの、ダンスを創るとはどういうことなのかを、改めて問いかけるような賞の在り方になればよいと考えております。その上で今回は下記のような性格づけをしました。」（KCA 実行委員長　佐東範一）

【KCA 京都賞】KCA KYOTO Award／
「ダンスは冒険である」という石井達朗さんの著書にあるように、今回最も冒険していると感じた作品。ダンスを創ることは冒険以外の何物でもない、と感じさせる作品。【冒険】とは、危険な状態になることを承知の上で、あえて行うこと。成功するかどうか成否が確かでないことを、あえてやってみること。最もダンスの「冒険」を感じさせる作品を選出下さい。

【KCA 奨励賞】KCA Incentive Award／
インセンティブとは、やる気を起こさせるような刺激。動機付け。そのダンスを観たことで、何かを誘発するのではと思える作品。内包する起爆剤を感じさせる様な作品を選出下さい。

【KCA 敢闘賞】KCA Fighting-spirit Award／
勇敢に良く戦うこと。「何か」に対して戦いを挑み、新しいダンスの表現に至っていると感じた作品。その「何か」は、これまでのダンスかもしれないし、価値観かもしれないし、現代かもしれない。果敢に挑んでいる作品を選出下さい。

(b) 上演後の最終審査の過程

事務局の体制は、森・林が観客賞の集計、坂本は香港賞に関する香港ダンスエクスチェンジ・ディレクターのダニエルとのやり取り、神前が審査会記録及びサポート、佐東が審査会の司会を担当した。
2日目の公演終了後、ミーティングルーム2に全審査員が集合。はじめに各審査委員より全体的な感想を話していただく。今回の 6 組がそれぞれ方向性や質感が全く違うことが共通認識として出される。そして作品がそれぞれ異なるように、審査員の感想、意見もそれぞれ全く異なるものであった。
　意見を十分に出し合った後に、黒板の表に、それぞれの作品のところに「京都賞」「敢闘賞」「奨励賞」に〇を入れていった。その時点で、下島さんの作品に全員が何らかの〇を入れていた。他はばらつきがあった。その中で一番〇が少ない作品について、どうするかを全員で話し合った後、いったんその票を入れた審査委員が改めて他の人に入れなおす事とした。
　その後、またそれぞれの意見を出して話し合う。このプロセスを結果的に5回繰り返した。途中、「「敢闘賞」「奨励賞」は選びにくい、3 名を同じ「京都賞」にするのはどうか。」「全員に賞を与えることは出来ないのか。」など、様々な意見が出た。
　発表予定の時間の午後 7 時前になっても決まらず、7時5分前に 30 分の延長を決めた。最終的に、敢闘賞に該当する作品はなく、奨励賞を 2 作品にするということに落ち着いた。その後、ベストダンサー賞は、比較的すぐに決まった。30 分以上遅れて受賞者の発表を行う事となった。

(c)最終審査の過程での審査委員からの各作品へのコメント

全体

○ポジティブな意味で全員違うと感じた。賞を出すとなると、1 番 2 番 3 番と順位を付けることになる。それが出来ないと感じた。見ながらどうしたものかと考えていた。コンテンポラリーダンスの多様性をこれほど感じたことはない。

下島 礼紗 / ケダゴロ作品「sky」

○メッセージ性、あれをやってしまう勇気。考え続けている人であり、評価したい。
○圧倒的。楽しく見れた。(今回の 6 作品の中で)海外も含めて再演している作品と、いま作っている作品との差が圧倒的にある。
○身体の動かし方だけではなくて、身体の痛み、冷たさまで踏み込んでいるところが面白かった。
○彼女自身がポリティカルな意識を持っているわけではないが、いろいろなことを喚起させる。。
○冒険力が圧倒的。個人的には好きではない。観客体験としては嫌な人もいると思うが、遠慮せずあえて打ち出す冒険。
○大好物。しかし一方で、あのやりかたから出られなくなることを危惧している。政治的で少し不謹慎で、というところから・・。自分の芸術的なところから作品が離れていってしまうというか。どのように自分の芸術的なところと付き合っていけるかが少し不透明な感じがした。これからの道は険しいと思う。自分が創った作品に自分が巻き取られないようにしなければいけない。根性と情熱が必要。
○作品としての完成度は高く大変刺激的な作品ではあるが、振付という観点からすると残念ながら新しさは見受けられず、その点に関して今後の更なる研究、努力を期待したい。

松木萌作品「Tartarus」

○爽快感。ダンスっていいなとシンプルに思った。これを深めていくといい作品になるんじゃないかなと思えた。
○女性ソロがきれいだった。音と体の動かし方の一致とずらすところ、彼女のやろうとしているところと表現がうまく一致している。
○ナラティブ(物語)ー非ナラティブな要素を折り込んでいる。そういうものを足して違う要素を入れ込んでいる。トークはうまくなかったが、ポジティブに考えれば話せないぶん作品でカバーしている。作品にそれだけの力があった。
○今まで見たダンスの概念から自分の中では脱せていないと思った。

横山彰乃 / lal banshees 作品「海底に雪」

○独特の世界観持っている。冒険、次の新しい可能性を感じた。
○テーマをそのままバンっと打ちだすのではない作品。マネしたくなる動きがある。細かいところが印象に残っている。続けて観たいと思った。
○いかに実際に行われている事から飛躍できるか。作品がすこしぼんやりしているように思えたが、見ている人にインスパイアさせるインパクトが、ダンスそのもので問いかけるものがある。

小野彩加・中澤陽作品「バランス」

○作品創作に関して振付家を頂点としたヒエラルキーを否定し、開かれたコレクティブな関係でダンス創作を取り組もうとしている点、そういった創作の在り方への志向がダンスのみならずこれからの社会の在り方への挑戦に感じられた点に可能性を感じた。
○彼らの演劇作品を知っている。そちらの方が形になってきている。センスいい人たちで、これからに期待したい。
○何かに対して挑む、というところ。以前に拝見したかれらのダンス作品は、とても良かった。リズム、音を使い身体のいろんなリズムをつかう。既定の概念をまず取り払って、ダンスになる前を一から試してみる。演出、振付家、パフォーマーの関係性、三者のヒエラルキーも白紙にしようとしているのだろう。問い直している。何かに対しての挑みにあてはまる。

中根千枝・内田結花作品「移動する暮らし」

○今回参加した作品の中では聴くという行為にしっかりと踏みとどまることを選択しそこから生まれてくる動きをきちんと受け止め多様な声、風景に耳を傾ける身体を通して生まれた、3.11 以降をきちんと体現しているダンスだと感じた。
○貴重だと思った。いちばん感動した。これから舞台芸術がどうなっていくか分からないけど、舞台である必要がとてもある。身体でしかできない。これからどういうスケールを持てるのかが分からないけれども。
○自分の作品の方向性がはっきり決まっていてそれに向かって作っている。
○素晴らしいと思いながら見ていたが、様式に終始しているように感じた。緻密な仕事をしていることは評価できるが。振付をつくり

こむのはものすごい大変な事。最初から最後までシステムが一緒に思えたので、自分の思いこみをどこかでバサッと断ち切れる勇気が問われる。
〇独特の空気と時間が流れていた。行事とも違う、作りこんでいる感じがした。
〇場所をイメージする、コロナの時代を経て、身体を経て内省的に必死に留まってつくっている。
〇丁寧に作られていると感じたが、伝統的な所作を解体して組み合わせているようにみえる。
〇いまの情勢でこういうものが出てくることにはしっくりくるが、こういうアプローチは、今までもかなりたくさんある。しかし今までの人はその後の展開をみたことがない。小さなスペースでやり続けるケースが多い。最近スケール感の大きな作品がでてこないと感じていて、これからスケールの大きな作品を後押ししたい。

長谷川寧／冨士山アネット作品「Virtual Society」

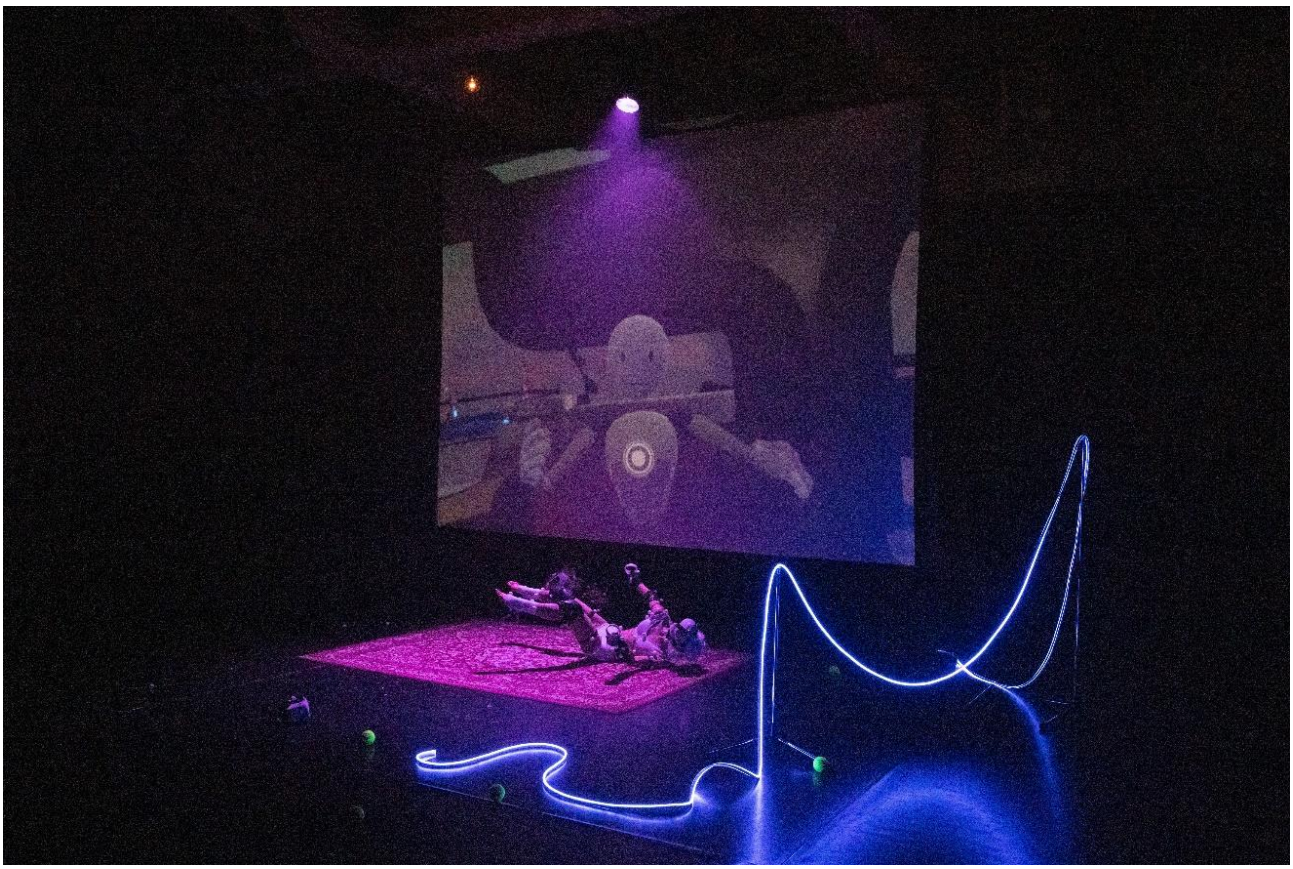
〇今回「映像の接続がテクニカル的にうまくいかなかった」と聞いた。その為、今回やろうと思ったことが伝わらなかったことは残念であった。
〇もっと知らないところに連れ込んでもらいたかった。
〇身体という意味では、頭で考えているところの方が強いように思えた。
〇触れるということがどういうことなのかなど、いろいろ考えさせてくれた。
〇VRが流行っている中で、VRを用いてトライアルしたと言えるが、実際にできたものを見れていないので、コメントできない。
〇自分自身のリアリティとVRの転換などもう少し欲しかった。

(d) 【香港賞】に関して

Hong Kong Dance Exchange アーティスティック・ディレクター　ダニエル・ユン氏から

「親愛なる皆さんありがとうございました。
今回の香港賞の該当者は無しという事にして来年に開催されるであろう当アワードまで、どなたをお招きできるか見送ることに致しました。
殊に、非常にゆっくりと静かで微妙な動きをされている方達の表現をモニター越しに観て判断するのはアンフェアーだという事に気付かされました。画面越しでは無く、ライブで鑑賞することで本当にどなたをお招きできるか決められないかと痛切に思いました。
　そこで、私の最終決断は、来年の当プログラムの実施を待ち、実際に現場で自分の目で見、振付家とお話をして決断したいという事です。なぜなら私のフェスティバルはビエンナーレ形式で 2 年に一度開催するので、次の開催は 2022 年の 8 月以降だからです。追記するなら、私自身は横山彰乃さんのトリオ作品が来年までにどういう風に発展して行くか見守りたいと思いましたが、来年のコンペティションでの作品と並行して熟考できると考えています。皆さんに私の趣旨が理解して頂ける事を切望しております。」

KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD2020　photo by umiak
上／ 横山彰乃 / lal banshees 「海底に雪」
下／ 小野彩加・中澤陽 「バランス」



KYOTO CHOREOGRAPHY AWARD2020　photo by umiak
上／ 長谷川寧／冨士山アネット「Virtual Society」
下／ 中根千枝・内田結花「移動する暮らし」

上演作品紹介＆振付家プロフィール

長谷川寧／冨士山アネット（東京）「Virtual Society」

構成・演出・振付：長谷川寧　出演：岡田玲奈、岡村圭祐、山本輝
協力:菅井一輝、竹崎博人

貴方と私の観ている事の狭間の相違の話では無く、
や だから貴方が総意と願う事の相違の話。
判る？ま、解らないか

「踊る阿呆に見る阿呆」
この囃子言葉には明確な隔たりが在る。
踊っている人間と、見ている人間だ。
「同じ阿呆なら踊らにゃ損損」
誰かがこうして隔たりを一纏めに熱狂させようとするが、
そもそも踊るって何の為の行為だった？
コンテンポラリーってどの時代の為の言葉だった？
踊らない事による損失って何だった？
それらにハタと立止まって答えようと息を整えていたら、とっぷり世界も夜更けてしまった。

長谷川寧／冨士山アネット
03 年冨士山アネット(フジヤマアネット)結成。異ジャンルとのコラボレーションを通じ作品の本質を見詰め直す「疑・ジャンル」をテーマとする。近年は 16 年[Attack On Dance]にて北京・サンパウロ・横浜と各地で滞在制作作品を発表する他、17 年 Theatertreffen International Forum（ベルリン）に参加。18 年[ENIAC]（ジャカルタ／Djakarta ARTS COUNCIL 招聘）、19 年臺北國際藝術村レジデンス採択、20 年國家兩廳院（National Theater and Concert Hall,Taipei）IDEA’s LAB. 参加。国内外の活動を軸に新たなアジアのヴィジョンを更新すべく精力的に活動中。
http://www.fannette.net/

photo by Marc Doradzillo

小野彩加・中澤陽（東京）「バランス」

出演：荒木知佳、立山澄　演出：小野彩加、中澤陽
保存記録：植村朔也　制作：花井瑠奈

均衡が外され続ける。社会に於ける「ツールとしての」ダンス。

「舞台芸術に成る以前のダンスを考察する」という主題を基に作品を作り続けている。
『バランス』では、社会に於ける「ツールとしての」ダンスを考察し、身体と動きが表象するコミュニケーションの「外」と、技術と振付の不成功により発生するアノミーの「内」とのバランスを探究する。

小野彩加・中澤陽
二人組の舞台作家として 2012 年より活動を始める。舞台芸術の既成概念に捉われず新しい表現思考や制作手法を開発しながら舞台芸術の在り方と価値を探究している。環境や人との関わり合いと自然なコミュニケーションを基に作品は形成され、作品ごとに異なるアーティストとのコラボレーションを積極的に行なっている。
https://spacenotblank.com/

photo by Dan Åke Carlsson

松木萌（京都）「Tartarus」

構成・演出・振付：松木萌
出演：今村達紀　松木萌

ゆっくりと急ぐ歯車の静々と迫る闇へ。

ギリシャ神話における奈落の神 Tartarus にとって闇とは、死、生、愛とはなにか。
地獄そのものと言われる神の奥底にある感情の起因のその振動は、宇宙を震わせ深い闇の門を叩いたその先の物語。

松木萌
2008 年に演出振付などを共同で行うダンスデュオ『はなもとゆか×マツキモエ』を結成。2015 年より同デュオの構成・演出を担当し京都、東京などで単独公演を行う。現在はジャンルレスなアーティスト集合体である ANTIBODIES Collective のメンバーとしても活動中。京都造形芸術大学映像舞台芸術学科卒業。

横山彰乃 / lal banshees（東京）「海底に雪」

振付・演出：横山彰乃　出演：後藤ゆう、SHlon、横山彰乃
協力：斎木穂乃香　南香織(LICHT-ER)
レジデンス協力：城崎国際アートセンター(豊岡市)

“よく知っている底から水面を見上げ　知らない水平線を思い浮かべず
音の届く先まで睡り　どこかの花を想う”

これは「海」をモチーフにした作品の一部です。
遠く離れた世界のことを簡単に知ることができるようになった今だけど、
どれだけ本当のことを見ることができるのだろうか。
様々な海から眺める水平線の先は、想像するにはあまりにも遠い。
自分が立っている海の底にも、人の目に触れない流れがきっとたくさんある。
潜ってみないとわからないことだらけで、本当は、何も知ってなんかいない。

横山彰乃
長野県の山奥出身。2016 年、lal banshees(らばんしーず)立ち上げ。モダンダンス・HIPHOP テクニックをベースとしながら、囚われず派生する身体の動きに着目し、独自のムーヴメントを目指す。これまでに敢えて女性の身体に絞り、中性的で音と動きの関係性が深い作品を発表。普通の事をファンタジックに切り取り現実に戻す音楽的ダンスを体現する。
www.yokoyamanaa.com

photo by AyakoTakamatsu

中根千枝・内田結花（大阪）「移動する暮らし」

振付･出演：中根千枝、内田結花
照明デザイン：三浦あさ子

日々、今日と、明日にのぞむ景色

シリーズ作品「暮らし」の新作として、2020 年 1 月から物理的な場所の移動を想定し制作をしてきました。暮らすことと踊ることを地続きに捉え、変容する事象、変わってしまったことを記憶した体で踊り、見る人の存在や視線を借りながら思考を重ねて、今回の上演へと向かいます。
共に同時代に居る、生きていることを、「暮らし」と呼ぶ時間の中で共有したいと考えています。同じ時を暮らす人たちへ敬意を込めて。

https://kurashinohyohon.tumblr.com/

中根千枝･内田結花
ダンサーの中根と内田によるユニット。2014 年 NPO 法人ダンスボックス主催「国内ダンス留学@神戸」第 2 期参加をきっかけに協働して作品創作を開始。18 年より、暮らすことがそのまま踊りにつながっていくというコンセプトの元、そこにあるものや行き交う人たちと時間や空間を共有することを試みたシリーズ「暮らし」を創作し、形を緩やかに変容させながら上演を重ねている。

下島 礼紗 / ケダゴロ（東京）「sky」

振付･構成･演出：下島礼紗
出演：伊藤勇太、小泉沙織、中澤亜紀、志村映美、秋田満衣、平田祐香、水口結、水澤茜嶺、
宮本蓮生、木頃あかね、下島礼紗
創作支援：横浜赤レンガ倉庫一号館 横浜ダンスコレクション

「総括」の名の下に、同志をリンチ殺害した連合赤軍事件。
この事件からインスピレーションを受けた私の勝手な“イデオロギー”の創作。

稽古場では、生み出された曖昧な物事をイデオロギーで正当化し、仲間たちと共に本番を目指してきた。
それが振付家の仕事だと思っているからである。だがこれは、「ダンス」というロマンチックな行為に身を捧げたいと熱望した馬鹿な人間の、現実的には全く無意味な行為かもしれない。それでも私は革命戦士になりたい。

下島 礼紗
鹿児島県出身。7 歳からよさこい踊りを中心に活動。桜美林大学にてコンテンポラリーダンスを木佐貫邦子に師事。2013 年にケダゴロを結成、全作品の振付・構成・演出を行う。「ダンス」とは「世の中を探る為の手法」である。という理念の元、作品創作を通して、人と出会い・世の中を学び・自らの考えを生むことを目的に活動。ソロ代表作『オムツをはいたサル』は、国内外多数のフェスティバルで上演。第 8 回エルスール財団新人賞などを受賞。

photo by Sato Mizuki

参加振付家の声：

Q 発見したこと、吸収できたこと等、振付家として（志す上で）プラスになったことをお聞かせください。

・多様性があるのは芸術として勿論の事、そこから何を目指すべきなのか、改めてダンスというメディアを通じ、志向性について考えるきっかけとなりました。（長谷川）

・昨今のコンテンポラリーダンスについて、また、コンテンポラリーダンスのアワードに作品を出すことについて、じっくり考えて話し合う時間をもてた。上演に向かう日々の中で、さまざまな役割をもつ方々（スタッフ、審査員、京都芸術センターの方々、家族や友人、ダンス仲間など）と関わることができ、その上で、個人で活動しているだけではみてもらえない人にもみてもらうことができたのは大きな収穫だった。ディスカッションの場では、わたしたちの踊りについてどのように言葉が尽くせるのか、哲学がもっと必要だと気がつけた。上演後には、ダンスの仲間たちと昨今のコンテンポラリーダンスについて話し、今後どのように活動していきたいかを考えるきっかけが生まれた。（内田）

・再演を通して作品の動き的なことはもちろん、内面的なところもダンサーと再確認したり、新たに考え直し動きに落とし込むなどのアレンジする作業に取り組めたことが、作家活動で新たな気づきに繋がった。
自分の作品について批評される際に、動きについてのみ述べられることが多く、それについて改めて考察を深められた。（横山）

・全く試みの違うダンス作品に触れることで、新たな刺激とダンス公演の可能性について考えるいいきっかけになりました。作品についてきちんと説明できる力がなければ振付家として、演出家として存在し得ないことを学びました。表現者としての言葉を今後身につけたいと思います。（松木）

・コンペティションという枠組み、制約の中で、自身の作品の核となるものへ向き合い提示することができた。現在の様な状況下での劇場空間で観客が居る中での上演を経て、作品そのものの成長と共に、今後の創作につながる視点を新たに得ることができた。
技術面・制作面で手厚くサポート頂いた方々の存在と、それぞれ異なる場で制作・発表を継続している作家やダンサーの姿に直接対面で出会えたことからも、感じ受け取ることが多かった。（中根）

・作品の相対的な価値を認識することができました。（小野・中澤）

・今回のアワードにディスカッションがあることが私の応募動機の一つでした。なぜなら、作品を観終えたあとに無関心でいられるような作品創りをしたくないと思っているからです。実際、様々なご意見や質問をいただき、終演直後の観客の生の声を聞ける貴重な機会となりました。私は自分の作品を言葉にすることがとても苦手な為、事前に少し準備をしていました。その工程の中で、作品を言葉にする訓練ができたように思います。“言葉にできないからダンスなんだ”ではなく、振付家として作品に責任を持ち、言葉にすることで一本筋を通すことは重要であるということに気付かされました。
また、今回上演させていただいた『sky』は 6 回目の上演でしたが、コロナ時代を迎えてからは初めての上演で、コロナ禍の前と後では、作品の見え方が変わるということを改めて認識することができ、コンテンポラリーダンス（同時代のダンス）の意義を実感しました。（下島）

Q.書ききれない事や、プログラムに対してのご意見・ご感想などがあれば、自由にお書きください。

・観客賞の投票に関しては、2 日間観た方が投票出来る物にしないと公平性が保たれない物だと思いますので、次回改善出来る事はあると思いました。またコロナ対策に関しては思いの外緩く、東京の様子とはまた違うと感じ、一部の参加者が気を遣っている分、全体に対してレギュレーションをもう少し整備出来る部分はあると感じました。今回は自分が「育成対象者」という対象となっている意識を感じ難いプログラムだと思ったので、育成対象者として今後具体的にどの様に育成をしていくのか、何か指針などあれば伺いたいな、と思っています。（長谷川）

・コンテンポラリーダンスという分野において、土台を揃えることが良いのかどうかに疑問を感じた。新たなダンスや振付にスポットライトをあてて、さらに活動を発展させる活路をつくっていくことを思えば、枠組み（上演時間、グループの在り方、上演形態など）はもう少し緩やかであっても良いのではないかと思う。
また、外部から照明家をつれてくることについて、わたしたちにとって消極的選択として捉えられたことには、とても違和感があった。テクニカルスタッフも含めて、コレクティブな形態で

作品を発表する団体も活躍しはじめている中、作品をつくる団体の在り方や上演にむかう過程の多様さにも目を向けると、本アワードのより強固な独自性を発見しそうだと思った。（内田）

・コンペティションなのでその先のチャンスを掴んでいくものということを踏まえた上ではあるものの、本公演同様時間をかけて取り組むので、自分の作品の性質上出演ダンサーが多ければ多いほど(上演時間が長いほど)たった 1 回の上演というのがカンパニー側の運営的に難しいように思えた。なので、コンペだったり 1 度きりの上演のようなものに参加することが今後あれば、その他での同作品の上演も行うというようなことを検討していきたい。
ディスカッションが鑑賞者対振付家だとディスカッションというより、ただ答えて終わるだけになってしまうのが少しもったいないと感じた。振付家同士でも話してみたい。（横山）

・今回、少し残念に感じ悔やんでいることが、オンライン視聴の観客数です。せっかくオンライン配信の環境を用意していただいただき、その上、投票数に応じて全収益を分配という、凄いシステムが用意されていたにもかかわらず、視聴数が少ないと感じました。私自身もアーカイブを拝見しましたが、素晴らしいカメラワークで撮影していただいていて、もっと多くの方々に観て欲しかったと感じました。
我々も含め、参加団体がもう少し告知を頑張れたのではないかと思います。アーティスは、活動資金を豊かにするチャンスをもっと活用すべきだったと思います。（下島）

授与式後の集合写真 photo by umiak

（2）その他

KYOTO Meeting（報告会＆ダンスミーティング）

運営：ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）

photos by Toshie Kusamoto

［報告会］3 月 11 日（木） 13：00-16：00
［ミーティング］3 月 12 日（金） 11：00-13：00
会場： 京都芸術センター フリースペース
共催：京都芸術センター Co-program カテゴリーD 採択企画

事業の成果など

報告会は、2020 年度（2020 年 8 月-2021 年 2 月）に実施された全国 9 のプラットフォームによる振付家育成プログラムの運営団体代表者にお集まりいただき、それぞれの事業の目的・成果・課題や展望等を報告いただくとともに、全体で共有した。

各地で行われた育成事業を各プラットフォームの代表者に映像を交えて話していただいた。コロナ禍において、オンラインによるワークショップが増えたが、それはマイナスなことだけではなく、全国の人が参加できるなど、新たな広がりが感じられた。特に、福岡のプログラム紹介では、ZOOM によるプレゼンテーションで、アメリカ在住のアーティスト、福岡の主催者、日本各地の参加者が、それぞれの立場からの成果を話すプレゼンとなった。

この報告会を経て、昨年以上に明確になった事は、「振付家を育成」する上で、振付家自身の自発的な課題意識に寄り添い、探求を重ねる事の重要性である。ともすると、即座に結果を求められがちであるが、育成には長い目でサポートが必要である。そもそも何をもって成果とするのか、その指標が単一である必要はなく、それぞれのプラットフォームがその現状と課題に基づき掲げた目的に沿って着実にプログラムを積み重ねていく事が、将来的にコンテンポラリーダンスという舞踊ジャンルの隆盛につながると考える。そのくらい「コンテンポラリーダンスの振付家」に求められる力・スキルは幅広く、かつ多様であり、ただ技術を磨き励まし合うのとは違う、ある種の開拓者を育てるような根気強い事である。そうした事を各地の共催者と考え話し合う場となった。

ダンスミーティングでは、コロナ禍において参加者がどのような活動をされてきたかを共有した。コンテンポラリーダンスのアーティストは、作品制作と並行して、福祉施設などでのワークショップを継続的に行っている方が多い。ある人は、コロナ禍であっても、障がい者施設などは、より人と関わることが求められるのでオンラインを通して継続してワークを行ってきた、と話をされたのが印象的であった。人と関われない時期だからこそ、よけいにダンスを通してアーティストと関わることが生活の中で求められていることを実感する。他に、オンラインによるダンス配信として VR によるダンス作品の紹介など、コロナ禍において、どのようにダンスを続けていくのか、この機会に何を始めたのか、など有意義な話し合いであった。

コンテンポラリーダンス・プラットフォームを活用した振付家育成事業
「ダンスでいこう!!」2020 年度　報告書

発行日：2021 年 7 月
発行：NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）
〒600-8092 京都府京都市下京区神明町 241 オパス四条 503
Tel: 075-361-4685　Fax: 075-361-6225

◇コンテンポラリーダンス・プラットフォームを活用した振付家育成事業「ダンスでいこう!!」2020
文化庁委託事業「令和 2 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」
主催：文化庁／NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）
各地共催・制作・協力：
北海道コンテンポラリーダンス普及委員会／ダンスハウス黄金 4442／Dance Camp Project／城崎国際アートセンター（豊岡市）／NPO 法人 DANCE BOX／FREE HEARTS／広島市安芸区民文化センター／C³/Contact Choreograph Crossing／一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメント／micelle／あけぼのアート&コミュニティーセンター（札幌）／フルイドハグハグ／NPO 法人コデックス／ダンスヒストリー・スタディーズ／Dance New Air（一般社団法人ダンス・ニッポン・アソシエイツ）／京都芸術センター（Co-program カテゴリーD「KAC セレクション」採択企画）

事務局：NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（JCDN）
統括：佐東範一　運営：神前沙織、榊原愛、松岡真弥
〒600-8092 京都府京都市下京区神明町 241 オパス四条 503
Tel: 075-361-4685　Fax: 075-361-6225　MAIL: danceitis@jcdn.org　Web: http://www.jcdn.org